

TOKYO FILMeX 2024

11.23 Sat - 12.1 Sun 第25回東京フィルメックス
会場 丸の内TOEI・ヒューマントラストシネマ有楽町

主催：特定非営利活動法人東京フィルメックス / 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(映画祭支援事業)、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】
特別協賛：シネマイニエティール / 協賛：デジタルメ、シマフィルム、コネクション、KODAK / 協力：アネ・フランセ文化センター、東映、東京テアトル、東京学生映画祭、Festival Scope

提携企画：Talents Tokyo 2024

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、タレントトーキー実行委員会 / 提携：ベルリナーレ・タレント(ベルリン国際映画祭) / 協力：ゲート・インスティテュート

TOKYO FILMeX 2024

11.23 Sat - 12.1 Sun 第25回東京フィルメックス
会場 丸の内TOEI・ヒューマントラストシネマ有楽町

主催：特定非営利活動法人東京フィルメックス / 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(映画祭支援事業)、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】
特別協賛：シネマイニエティール / 協賛：デジタルメ、シマフィルム、コネクション、KODAK / 協力：アネ・フランセ文化センター、東映、東京テアトル、東京学生映画祭、Festival Scope

提携企画：Talents Tokyo 2024

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、タレントトーキー実行委員会 / 提携：ベルリナーレ・タレント(ベルリン国際映画祭) / 協力：ゲート・インスティテュート



Want the film look? SHOOT FILM.

kodak.com/go/motion

INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

T O K Y O

FILMeX

第25回東京フィルメックス

2024 11/23(sat) - 12/1(sun) (全9日間)

for the bright future of cinema

公式カタログ TOKYO FILMeX 2024 OFFICIAL CATALOG

開催概要 SUMMARY

名称 第25回 東京フィルメックス / TOKYO FILMeX 2024
期間 2024年11月23日(土)～12月1日(日)
会場 丸の内TOEI、ヒューマントラストシネマ有楽町
主催 特定非営利活動法人東京フィルメックス
共催 朝日新聞社
助成 文化庁文化芸術振興費補助金(映画祭支援事業)、
公益財団法人東京歴史文化財団 アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】
在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ
特別協賛 シネマイニユティル
協賛 デジタメ、シマフィルム、コネクション、KODAK
協力 アテネ・フランセ文化センター、東映、東京テアトル、東京学生映画祭、Festival Scope
(提携企画 Talents Tokyo 2024)
主催 東京都、公益財団法人東京歴史文化財団 アーツカウンシル東京、タレント・トーキョー実行委員会
提携 ベルリナーレ・タレント(ベルリン国際映画祭)
協力 ゲーテ・インスティトゥート

上映プログラム 東京フィルメックス・コンペティション …… 10作品
特別招待作品 …… 11作品
メイド・イン・ジャパン …… 4作品
プレイベント:今だけ、スクリーンで!東京フィルメックス25年の軌跡 …… 6作品

【関連企画】

- ①『Some Strings』特別上映会
 - ②現代ドイツ映画作家シリーズ(特別編)ペーター・シャモニ 日本未公開作上映
 - ③アモス・ギタイ監督「家」三部作一挙上映 …… 5作品
- 全36作品

Title: TOKYO FILMeX 2024 (25th Edition)

Dates: November.23 (Sat.) - December.1 (Sun.), 2024

Venues: Marunouchi TOEI, Human Trust Cinema Yurakucho, (Talents Tokyo 2024) Yurakucho Asahi Hall

Presented by: TOKYO FILMeX Organizing Committee (Non-profit Organization)

Co-presented by: The Asahi Shimbun Company

Supported by: Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Ambassade de France au Japon / L'Institut français du Japon

Special Supporter: Cinema Inutile

Sponsors: digitame, SHIMA FILMS, Connections, KODAK

With the cooperation of: Athénée Français Cultural Center, TOEI, Tokyo Theatre, Tokyo Student Film Festival, Festival Scope

"Talents Tokyo 2024" co-organizer: Tokyo Metropolitan Government, Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture),
and Talents Tokyo Organizing Committee

"Talents Tokyo 2024" in Cooperation with Berlinale Talents

"Talents Tokyo 2024" in Collaboration with GOETHE-INSTITUT Tokyo

Programs 2024

TOKYO FILMeX Competition: 10 films

Special Screenings: 11 films

Made in Japan: 4 films

Pre-Event: A Cinematic Journey on the Silver Screen:

25 years of TOKYO FILMeX: 6 films

Side Events: 5 films

Total Number of films: 36 films

目次

Contents

第25回東京フィルメックス公式カタログ

TOKYO FILMeX 2024 Official Catalog

03	サポーターズ・クラブのご案内 TOKYO FILMeX Supporters Club Membership	33	イベント
04	第25回東京フィルメックス コンペティション審査員紹介 Members of the Jury, TOKYO FILMeX 2024 Competition	35	第25回東京フィルメックス関連企画
05	第25回東京フィルメックス コンペティション TOKYO FILMeX 2024 Competition	36	Talents Tokyo 2024
16	第25回東京フィルメックス 特別招待作品 Special Screenings	37	協力者一覧 Acknowledgements
28	第25回東京フィルメックス メイド・イン・ジャパン TOKYO FILMeX 2024 Made in Japan		

主催者からのメッセージ

第25回東京フィルメックスで上映する作品の監督はじめ作品関係者に御礼申し上げます。
そして、開催に尽力して下さった、ご協賛企業・助成団体の皆様、ご協力頂きました企業・団体の皆様、
そしてサポーター会員の皆様にも深く感謝申し上げます。

映画作家を支える映画祭のプラットフォームを堅持するために、
今後とも皆様の変わらぬご支援の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

A Message From the Organizers

We'd first like to thank the directors and those involved with the films that will be screened
at TOKYO FILMeX 2024.

We'd also like to thank our co-presenter, supporters, sponsors, cooperating organizations,
and supporting members.

We kindly as for the honour of your continued level of support
moving forward so that we may uphold the film festival platform which sustains the filmmakers.

第25回東京フィルメックスをご支援いただいた方々

TOKYO FILMeX 2024 Supporters Club Members & Donors

東京フィルメックスの趣旨に賛同し、活動を支援頂きました第25回東京フィルメックスサポーター会員、ご支援者の皆様に御礼申し上げます。

MIZUNO MIKI	杉原賢彦	坂本明	阿部雅昭	陳俊亦	久米良和
タカハシマサトモ	王心怡	葛野章	市山久美子	宮善善文	石川健
つむじ風 (操行ゼロ)	李笑竹	渡邊久三恵	小野道子	森田聖美	相馬敬徳
眠眠スネーク	西田康祐	水口勝秀	久保幸子	小林美恵子	櫻井秀則
野中由紀子	景山咲子	瀧澤美和	松浦秀明	反町和宏	諏訪智岳
北真理子	渡辺健太郎	大間遼夫	熊谷睦子	樽井智	芳賀裕子
高野裕之	南泉雅昭	飯田昌宏	反町弘子	渡邊瑞帆	
森田裕介	金谷重朗	松崎理	石木秀明	柳浦俊	
高橋博美	福嶋真砂代	福田美知子	村越加代子	本多梢	
加藤初代	胃甲貴子	清水志乃	橋口和也	小林藍	
大塚香織	加藤圭子	市山和男	佐々田悠斗	井ノ上靖	
佐藤京子	太田朗子	山本宗子	風呂本諒亮	長崎徳恭	
濱崎真由子	福島聖高	高野英子	西池陽一	山口和広	

※※順不同。
上記の他、98名の会員の皆様からご支援頂きました。
(10月20日現在)

特定非営利活動法人東京フィルメックス実行委員会 ミッション・ステートメント (令和6年11月現在)

存在意義 (役割)

映画の限らない創造性と未来の可能性を追求し、人間性や社会性を深く表現する映画文化は私たちの暮らしに潤いをもたらすという理念のもと、その意義を多くの人々と分かち合い、平和で心豊かな生活の実現に資するために存在します。

そのために、当会は映画という芸術を通じて国際文化交流・人材育成を目指し、国際映画祭「東京フィルメックス」をはじめ、映画の上映や関係する人材の教育等を通じて、以下の役割を果たします。

- 国際映画祭の真価を追求し、東京と世界から必要とされる機能を担います
- 東京という都市の魅力をより活かすイベントを展開します
- アジアを中心に世界で起こりつつある映画表現の新しい動きを幅広く紹介します
- 内外の映画人や観客が集う場として、様々な交流や人々の参画を生む触媒となります
- 創造性溢れる作家を育てます
- 種々の地域独自の文化を尊重し、また国際的な観点を導入し、広い視野を提示します
- 優れた創作である映画を通じて、見るものの価値観を醸成させる場を目指します
- NPOの特徴を生かし独立的な立場で、既存体制を補完する形で映画文化に貢献します
- 地域の映像文化の振興に資する映画祭を実施・支援します
- 文化としての映画を、より多くの人々にひらくよう務めます

目指す方向性 (特徴・ビジョン)

東京フィルメックスは、以下の3つのコンセプトを実現する映画祭を目指します。

これら役割を果たすため、当会は国際交流、および社会と映画文化をつなぐスペシャリスト集団を目指し、担い手として紹介する企画に責任を持ち、運営に際し法令を遵守し、公正であるよう務めます。

「未来・創造」

「映画の未来」に向かってチャレンジする作家、作品を支援します。表現の可能性に挑む、刺激的で創造性に富んだ新鮮な作品を紹介します。

「連動・発信」

新旧様々な日本映画を広く海外に紹介し、東京に世界の映画の今を提示する、双方向で新しい映画の流れを提案します。海外の関係機関、国際映画祭等と世界的なネットワークを築き、国際的に意義深い企画を実施します。

「教育・交流」

お客様と作り手、作り手同士の交流を推進し、出会いの場を演出します。豊かな心の醸成を目指し、未来の映画ファンを育成を推進し、ボランティアなど学習の機会も提供します。

第26回 東京フィルメックス サポーターズ・クラブ会員募集のご案内

オンライン決済でのサポーター入会も受付中!

あなたのご支援が映画作家を育てます。国際映画祭にご参加ください。●年会費10,000円

※第26回の募集締切は2025年10月末日です。

- ★会員の皆様には
- メールマガジンを不定期でお届けします。
 - その他、会員限定のイベントやプレゼントなども企画中です。
 - なお、2025年10月末までにご入会いただいた方には、東京フィルメックスのチケット先行発売などを予定しています。
 - 東京フィルメックス公式カタログにお名前を掲載いたします。(ご希望の方のみ)

クレジット決済によるオンライン入会も可能です。公式サイト内「支援する」から「サポーターとなって支援する」へお進み下さい。

お問い合わせ先 映画祭公式サイト: filmex.jp E-mail: npo@filmex.jp TEL: 03-6258-0333

第26回東京フィルメックス開催! 会期: 2025年11月22日(土)~11月30日(日) (予定)

プログラム詳細は10月上旬頃に公式サイトにて発表予定。 TOKYO FILMeX 2025 Dates: Nov.22 - Nov.30, 2025

ご支援 (寄付) のお願い

映画祭等の事業の実施や団体の運営などのNPO活動に対して、皆様のご支援をお願いしております。当会では、年間あたり3,000円以上の寄付者100人以上獲得を目指しています。当会のミッションに共感していただいた皆様のご支援をお願い申し上げます。サポーターの方によるご寄付のお申し出も承ります。皆様からのご支援は、映画祭開催のための費用として活用させていただきます。ご寄付は1口3,000円からお受けしており、何口でもお受けいたします。公式サイト内「支援する」→「寄付をして支援する」からクレジットカードで寄付が出来ます。

第25回東京フィルメックス・コンペティション 審査員紹介

TOKYO FILMeX 2024 Competition Jury

The Jury Members



ロウ・イエ LOU Ye
中国 / 映画監督 China / Film Director

1965年、上海生まれ。上海大学美術学院にてアニメーションを学び、その後北京電影学院にて映画制作を学ぶ。94年、初の長編劇映画『デッド・エンド/最後の恋人』を監督するも、中国国内では2年間の上映禁止となる。2作目『ふたりの人魚』(00)はロッテルダム映画祭タイガー・アワード、また第1回東京フィルメックスで最優秀作品賞を受賞したが、同じく中国では上映禁止となる。現代中国映画における古典とみなされる同作は、2021年に自身の監修の元でオリジナルの16mm A-Bネガより4K復元された。

続く『パープル・バタフライ』(03)、『天安門、恋人たち』(06)、『スプリング・フィーバー』(09)は全てカンヌ映画祭コンペティションに出品。パリを舞台にした『パリ、ただよう花』(11)はヴェネチア映画祭にて上映された。『二重生活』(12)は再びカンヌ映画祭のある視点部門に出品。『ブラインド・メッセージ』(14)はベルリン映画祭コンペティション部門で上映され銀熊賞(芸術貢献賞)を受賞。『シャドウプレイ』(18)は台北台湾金馬奨で、『サタデー・フィクション』(19)はヴェネチア映画祭にて上映された。

Lou Ye was born in Shanghai in 1965. He studied animation at the Shanghai School of Fine Arts and then filmmaking at the Beijing Film Academy. His debut film, "Weekend Lover" (1994), was banned for two years in China. He attracted international acclaim with his second feature "Suzhou River" (2000), which won the Tiger Award at the International Film Festival Rotterdam. It too was banned in China. The film, now considered a classic of modern Chinese cinema, was restored in 4K in 2021, under the supervision of Lou Ye himself, working from the original 16mm A-B negative. His next three films: "Purple Butterfly" (2003), "Summer Palace" (2006), and "Spring Fever" (2009) were all selected in Competition at Cannes. His Paris-set film "Love and Bruises" (2011) premiered at the Venice International Film Festival. Ye returned to Cannes with "Mystery" (2012), which was selected for Un Certain Regard. "Blind Massage" (2014) premiered in Competition in Berlin and won the Silver Bear for Outstanding Artistic Contribution. "The Shadow Play" (2018) premiered at the Taipei Golden Horse Film Festival. "Saturday Fiction" (2019) was selected in Competition at Venice.



カトリーヌ・デュサール Catherine DUSSART
フランス / 映画プロデューサー France / Film Producer

経営学を学んだのち、広報担当者としてキャリアをスタートさせるも、すぐにプロデューサーに転身。短編映画のプロデューサーを経て、テレビと劇場の両方で長編映画やドキュメンタリーの制作に進んだ。1992年にLes Productions Dussartを、1994年にCDPを設立し、これまでに15カ国以上で100本以上の映画を制作している。近年の作品には2024年のカンヌ映画祭カンヌ・プレミア部門で上映されたリティ・パン監督『ボル・ポトとの会合』、ベルリン映画祭コンペティション部門で上映されたミン・パハドゥル・バム監督『Shambhala』があり、いずれもアカデミー賞への公式エントリー作である。その他のプロデューサー作品にはアモス・ギタイ監督の『Shikun』(24)、『ハイファの夜』(20)、『エルサレムの路面電車』(18)やリティ・パン監督の『すべては大丈夫』(22)、『照射されたものたち』(20)、『名前のない墓』(18)、『エグジール』(16)、『フランスは我等が故国』(15)、『消えた画 クメール・ルージュの真実』(13)、アディティヤ・ヴィクラム・セングプタ監督の『Once Upon a Time in Calcutta』(21)、『Jonaki』(18)、ピッポ・デルボノ監督の『Vangelo』(16)、『Evangile』(16)などがある。

After she graduated from a school of management, Catherine Dussart began her career as a press officer but soon turned into a Producer. She started producing short films and naturally graduated to feature films & documentary productions both for television and cinema. She established Les Productions Dussart in 1992 and CDP in 1994. Since she has produced almost 100 films in more than 15 countries. Her last productions include "Meeting with Poi Pot" by Rithy Panh Cannes Premières 2024, "Shambala" by Min Bahadur Bham Berlinale Competition 2024, both of them are the official entries of their countries to the Academy awards, "Shikun" by Amos Gitai Berlinale 2024. "Everything Will Be OK" by Rithy Panh (Silver Bear Berlinale 2022), "Once Upon a Time in Calcutta" by Aditya Vikram Sengupta (Venice Orizzonti 2021), "Laila in Haifa" by Amos Gitai (Official Competition Venice 2020), "Irradiated" by Rithy Panh (Best Documentary Berlinale 2020), "Graves without a name" by Rithy Panh (Venice, Telluride, Toronto 2018), "A Tramway in Jerusalem" by Amos Gitai (Venice 2018), "Jonaki" by Aditya Vikram Sengupta (Rotterdam 2018) "Vangelo" by Pippo Delbono (Venice 2016). "The Missing Picture" by Rithy Panh which received Un Certain Regard Award at the Cannes in 2013 and was later nominated for the Oscars in the Best Foreign Film category; other credits include "In this land lay graves of mine" by Lebanese director Reine Mitri (DIFF Dubai); "9 doigts" by F. J. Ossang, (Best director award at Locarno 2017); "France is our Mother Country" by Rithy Panh (Fipa 2015); "The Fourth Direction" by Indian director Gurvinder Singh (Official Selection, Un Certain Regard, Cannes 2015), "The Black Hen" by Nepalese director Min Bahadur Bham (Nepal) (Critics Prize, Venice 2015); "Exil" by Rithy Panh (Official Selection, Cannes 2016); "Evangile" by Pippo Delbono (Official Selection, Venice 2016). "Somewhere in Between" by Yesim Ustaoglu Venice 2013.



ラ・フランシス・ホイ La Frances HUI
アメリカ / キュレーター USA / Curator

ニューヨーク近代美術館(MoMA)で映画キュレーターとして活動。これまでにイ・チャンドン、アンドレイ・ズヴィアギンツェフ、フェデリコ・フェリーニ、内田吐夢、ツイ・ミンリャン、ジョニー・トー、ペドロ・アルモドバルといった監督の特集を企画・共催。また、イラン、インド、フィリピン、ラテンアメリカの映画の調査にも参加。2016年にNew Directors/New Filmsの選考委員会に参加し、2020年からは同フェスティバルの共同代表を務めている。サンダンス映画祭、釜山映画祭、FIRST映画祭、ウディネ極東映画祭、香港映画祭の審査員も務めた。

La Frances Hui is Curator of Film at The Museum of Modern Art (MoMA) in New York. She has organized and co-organized retrospectives of film directors including Lee Chang-dong, Andrey Zvyagintsev, Federico Fellini, Tomu Uchida, Tsai Ming-Liang, Johnnie To, Pedro Almodóvar, as well as surveys of Iranian, Indian, Philippine, and Latin American cinemas. She joined the selection committee of New Directors/New Films in 2016 and has led the festival as its co-chair since 2020. Hui has served on award juries for Sundance Film Festival, Busan International Film Festival, FIRST International Film Festival, Udine Far East Film Festival, and Hong Kong International Film Festival.

第25回東京フィルメックス・コンペティション

TOKYO FILMeX 2024 Competition

会場：丸の内TOEI、ヒューマントラストシネマ有楽町

Venue: Marunouchi TOEI, HUMAN TRUST CINEMA Yurakucho

世界的に大きな注目を集めるアジアからは、才能ある新鋭たちが次々と登場しています。そんなアジアの新進作家が2023年から2024年にかけて監督した作品の中から、10作品を上映します。また3名からなる国際審査員が、最優秀作品賞と審査員特別賞を選び、11/30(土)に行われる授賞式で発表します。

This year's TOKYO FILMeX Competition will present 10 new films by the best emerging filmmakers in Asia. A Jury consisting of three international film professionals will judge the films in this program, and the following prizes will be announced at the award ceremony on the evening of November 30th.

最優秀作品賞

副賞として賞金70万円が監督に授与されます。

Grand Prize: The winning film's director will receive 700,000 yen.

審査員特別賞

副賞として賞金30万円が監督に授与されます。

Special Jury Prize: The winning film's director will receive 300,000 yen.

観客賞

11月29日までに上映される全作品が対象になります。

この賞は監督に授与されます。

Audience Award: Please take part in voting for the TOKYO FILMeX Audience Award.

This award will be given to the director of the film with the highest score.

学生審査員賞

東京学生映画祭主催の「学生審査員賞」は3人の学生審査員がコンペティション部門の作品を対象に審査し、11月30日(土)の授賞式で最優秀作品を発表します。学生審査員の選任から、賞の運営までを東京学生映画祭の手で行います。東京学生映画祭<<http://tougakusai.jp>>

学生審査員

川島佑喜 / 武蔵野美術大学

監督作：I AM NOT INVISIBLE(第35回東京学生映画祭実写短編部門グランプリ、PFFアワード2024グランプリ、あいち国際女性映画祭2024ドキュメンタリー部門観客賞)

眞島淳之介 / 東京造形大学

監督作：『翔のいた夏』(第35回東京学生映画祭実写部門審査員賞)

火宮遼哉 / 明治学院大学 東京学生映画祭企画委員

Student Jury: Three student jurors will evaluate the 8 films in competition, and the "Student Jury Prize" winning film will be announced at the award ceremony on Sunday, November 30. The selection of the student jurors and the administration of the prize will be undertaken by the Tokyo Student Film Festival.

Student Jury: KAWASHIMA Yuki (Musashino Art University), MASHIMA Junnosuke (Tokyo Zokei University), HINOMIYA Ryoya (Meiji Gakuin University)

P06 ● 四月／デア・クルムベガスヴィリ

April France, Italy, Georgia / Director: Dea KULUMBEGASHVILI

P07 ● ハッピー・ホリデー／スキャンダル・コプティ

Happy Holidays Palestine, Germany, France, Italy, Qatar / Director: Scandar COPTI

P08 ● サントーシュ／サンディヤ・スリ

Santosh India, UK, Germany, France / Director: Sandhya SURI

P09 ● 女の子は女の子／シュチ・タラティ

Girls will be Girls India, France, USA, Norway / Director: Shuchi TALATI

P10 ● ベトとナム／チューン・ミン・クイ

Viet and Nam Vietnam, Philippines, Singapore, France, Netherlands, Italy, Germany, USA / Director: TRUONG Minh Quy

P11 ● 黙視録／ヨー・シュウホア

Stranger Eyes Singapore, Taiwan, France, USA / Director: YEO Siew Hua

P12 ● 白衣蒼狗／チャン・ウェイリヤン／共同監督 イン・YOUチャオ

MONGREL Taiwan, Singapore, France / Director: CHIANG Wei Liang Co-Director: YIN You Qiao

P13 ● 空室の女／チウ・ヤン

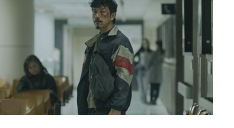
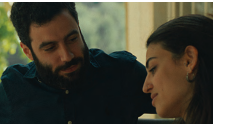
Some Rain Must Fall China, USA, France, Singapore / Director: QIU Yang

P14 ● 家族の略歴／リン・ジェンジエ

Brief History of a Family China, France, Denmark, Qatar / Director: LIN Jianjie

P15 ● ソクチョの冬／コウヤ・カムラ

Winter in Sokcho France, Korea / Director: Koya KAMURA



東京フィルメックス・コンペティション

11.24 (Sun.) 12:50 / 11.29 (Fri.) 21:10

サントーシュ

India, UK, Germany, France / 2024 / 127 min



作品解説

サントーシュが警察官として働き始めたのは、殉職した警察官の未亡人が職を継承できるという政府の制度のためだった。慣れない仕事に順応していく中で、彼女はすぐに、昔ながらの警察のやり方を体験し、そこに否応なく参加することになる。性差別、汚職、権力闘争、そしてカースト制度や宗教による社会の分断。レイプされ、殺害され、地元の井戸に捨てられた、いわゆる「不可触民」である少女の死の捜査を、ベテランでカリスマ性のある女性警察官、シャルマ警部の指揮の下で担当することになったサントーシュは、彼女を刺激的な指導者であり、フェミニスト的な連帯の拠り所と見なすようになるが……。映画はあくまでもサントーシュ個人の視点を保ちつつ、彼女が何を受け入れ、内面化し、実践できるか、という感情の旅を描いていく。その過程で社会の腐敗を構造的で世代的なものとして描き出し、その複雑なニュアンスを見事な忍耐と厳格さで探求している。カンヌ映画祭のある視点部門で上映。第97回アカデミー賞国際長編映画賞部門のイギリス代表作品に選出されている。

**監督****サンディヤ・スリ**

Sandhya SURI

ロンドンを拠点に活動するイギリス系インド人の監督・脚本家。2024年のカンヌ映画祭ある視点部門にて劇場画としての長編第一作となる「サントーシュ」が上映され、高く評価された。同作はサンダンス・インスティテュート・スクリーンライターズとディレクターズ・ラボの両方に選出され、BBC Films、BFI、Arteの出資により完成。

初の短編劇映画「THE FIELD」はトロント映画祭の最優秀国際短編映画賞を2018年に受賞し、2019年にBAFTA 最優秀短編映画賞にノミネートされた。長編ドキュメンタリー作品「I FOR INDIA」はサンダンスの国際コンペティションで上映され、その後も20以上の国際映画祭で上映、いくつかの賞を受賞し、イギリスとアメリカで劇場公開を果たす。また、スクリーンインターナショナル誌のStar of Tomorrow 2023にも選出された。

Notes

When Santosh’s husband is killed in the line of duty, a government policy for widows allows her to assume his job as police officer. As she adjusts to the unfamiliar role, she soon finds herself immersed in and compelled to navigate the outdated practices of policing, which are sexist, corrupt, and rife with both power struggles and the social divisions of caste and religion. Under the direction of an experienced and charismatic female police officer, Inspector Sharma, Santosh is tasked with investigating the death of a young "untouchable" girl who was raped, murdered and dumped in a local well. At first she sees her superior as an inspiring mentor and a source of feminist solidarity, but the reality turns out to be different. Told steadfastly from Santosh’s perspective, the film depicts her emotional journey in learning what she comes to accept, what she internalizes, and what changes she is able to enact. There within we witness structural and generational corruption, explored with meticulous attention to detail and remarkable rigor. Screened in the Un Certain Regard section of the Cannes Film Festival and selected as the UK entry for the Best International Feature Film category at the 97th Academy Awards.

Director’s Biography

Sandhya Suri is a British-Indian writer-director based in London. Her debut feature, “Santosh” premiered at Cannes in Un Certain Regard to critical acclaim in May this year. The film, which was selected for both the Sundance Screenwriters and Directors Labs, was financed by BBC Films, BFI and Arte.

Sandhya’s first fiction short, “The Field”, won Best International Short Film at TIFF in 2018, and was BAFTA-nominated for Best Short Film in 2019. Her feature documentary “I For India” premiered in the World Competition section of the Sundance Film Festival, screened at over 20 international festivals and garnered several awards before being released theatrically to critical acclaim in the UK and the US.

Sandhya was selected as a *Screen International*’s Star of Tomorrow 2023.

Santosh

東京フィルメックス・コンペティション

11.25 (Mon.) 15:05 / 11.30 (Sat.) 21:10

女の子は女の子

India, France, USA, Norway / 2024 / 118min



作品解説

模範的な生徒である16歳のミラは、ヒマラヤにあるエリート寄宿学校において、学校全体の行動と学習の基準を設定する責任者である監督生に女子生徒として初めて就任する。野心的で潔癖な性格にも関わらず、彼女は新入生のスリに対して初恋の痛みを覚え、最初の欲望に早々に屈してしまう。彼女の初恋と性欲に対する探求は、しかしながら、母親の介入によって思わぬ方向へと向かう。母親とスリの奇妙な親密さはミラの嫉妬と不安を引き起こし、母と娘の間にぎこちなく、重い溝を作っていく……。映画はインド社会の伝統的な価値観、とりわけ家父長制の陰が彼女たちの人生にいかにもまだ影響しているかを検証しつつ、母と娘の間の絶え間ない駆け引きや緊張関係に迫っていく。美化や中傷をすることなく、親密さ、自己承認、裏切りや許しのほんの僅かな瞬間をカメラは捉えている。サンダンス映画祭のワールド・シネマ・ドラマティック部門にて初上映され、主演のプリーティ・パニグラヒの演技に対して特別審査員賞が授与され、同時に観客賞も受賞した。

**監督****シュチ・タラティ**

Shuchi TALATI

インド出身の映画監督であり、ジェンダーやセクシュアリティなど南アジアのアイデンティティの支配に挑戦する物語を制作している。

初長編映画である「女の子は女の子」は Aide Aux Cinémas du Monde と Sorfond グラント、ベルリン映画祭 Co-Production マーケットの ArteKINO と VFF タレントアワードを受賞し、Gotham Week、ベルリン映画祭 Script Station と Cine Qua Non の脚本ラボにも選出され、

2024年のサンダンス映画祭コンペティション部門で上映された。

短編作品「A Period Piece」はSXSWに出品され、別の短編作品「[Mae and Ash]」はVimeoスタッフピックになるまでに多くの賞を受賞している。

メッセージ

「女の子は女の子」は、私が通っていたような表向きには少女たちの「貞操」を守るために少女たちが監視されている保守的な学校が舞台です。男子のセクシュアリティの表現は許され、時には女子に対して攻撃的であり、私たちは従順で自分の体を感じるように指導されています。それでも、周囲には社会的および感情的な規範を押し、回避した強くてユーモラスな少女や女性たちがいました。「女の子は女の子」では、私の人生には存在していたに決してスクリーンでは見かけられることなかった、そんな逆境に挑む女性たちについて書きたかったのです。そして、インドの女性たちが手にする物語の幅を広げたいと考えています。

インド（や西洋）の映画では、女性たちの身体は頻繁に消されています。胸やお尻は過度に性的に描かれるのに、マスターベーション、生理、女性器などは、嫌悪や恥をもって扱われます。この排除は、少女たちが自分のセクシュアリティ、アイデンティティ、そして声に対して恐れを抱かれる世界で、存在しないかのように扱われることの一環にすぎません。しかし、ミラ（16歳）と母親のアニラ（38歳）は分泌物と欲望を持つ生身の存在です。ミラは、ボディヘアを剃りながらマスターベーションをし、鏡の前で鏡の観察をします。そして、初めてのセックスの計画をたてます。アニラは自己犠牲性、異性愛が押し付けられる母親役を拒否します。彼女は、娘の高さとボーイフレンドに嫉妬し、自らの欲望を熱心に追求します。彼女は、娘の高さとボーイフレンドに嫉妬し、自らの欲望を熱心に追求します。母と娘は共に軍需で逆境に挑むキャラクターであり、必ずしも勝者ではないにせよ、屈せず立ち向かいます。この映画は1990年代後半が舞台で、インド経済が西洋の輸出品に開放された時期です。これは、豊楽した「西洋性」と真実な「インド性」の間で激しい文化戦争を引き起こしました。女性の身体は戦場となり、ミニスカートを履いた女性もしくは性的に自主性を持つ女性は汚職のシンボルとなりました。残念なことには現在は世界でも多くの地で恐ろしいほど共鳴しています。この映画は1990年代のインドに根差し、性別役割、セクシュアリティと抑圧的な家父長制を鋭く観察していますが、私は社大な主張や社会問題のお説教をする気はありません。私にとって重要なのは、ミラとアニラがインド人女性としてのアイデンティティによって定義されず、彼女たちが自分のコミュニティの代弁者になる必要がないことなのです。彼女たちに人間としての幅広い感情を持たせたいと思っています。愛し、失望や嫉妬、悲しみを経験し、彼女たちの特有で唯一無二の存在だけを表現させたいのです。文化全体を代表させる必要はありません。文化全体を代表させる必要のないものになる理由であり、それは主に支配的な文化のキャラクターに特権として与えられる寛容です。

監督●シュチ・タラティ **脚本**●シュチ・タラティ **プロデューサー**●リチャ・チャード、クレア・シャッサーニ、シュチ・タラティ **撮影監督**●ジー・ベン **編集**●アムリタ・デヴィッド **キャスティングディレクター**●ディップ・ジャンク **アートディレクター**●アヴィヤクタ・カプール **衣装デザイン**●シャーヒド・アミール **サウンド**●コリン・ファープル・プシ、キャロル・ヴェルナー、ローラ・アルト **音楽**●ピエール・オーパー・カンパ、スネハ・カーンワラル **製作**●Cies Pushing Buttons Studio, Dolce Vita Films, Crawling Angels Films, Cinema Inutile, Blink Digital, Arte Cofinova, Hummelfilm **ワールドセールス**●Luxbox **出演**●プリーティ・パニグラヒ - ミラ、カニ・クสลティ - アニラ、ケジャヴ・ピノイ・キロン - スリ **Director**●Shuchi Talati **Screenwriter**●Shuchi Talati **Producers**●Richa Chadha, Claire Chassagnne, Shuchi Talati **DOP**●Jih-E Peng **Editor**●Amrita David **Casting Director**●Dilip Shankar **Art Director**●Avyakta Kapur **Costume Design**●Shahid Amir **Sound**●Colin Favre-Bulle, Carole Verner, Laure Arto **Original Music**●Pierre Oberkampff, Sneha Khanwalkar **Production**●Cies Pushing Buttons Studio, Dolce Vita Films, Crawling Angels Films, Cinema Inutile, Blink Digital, Arte Cofinova, Hummelfilm **Cast**●Preeti Panigrahi, Kani Kusruti, Kesav Binoy Kiran **World Sales**●Luxbox

Girls Will Be Girls

Notes

Mira, a 16-year-old model student at an elite boarding school in the Himalayas, becomes the first female student to be appointed as the school supervisor to set the standard of behaviors and learnings throughout the school. Despite her ambitious and fastidious nature, she feels the ache of first love when she meets Sri, and prematurely gives in to her desires. Her exploration of first love and sexual desires, however, takes an unexpected turn when her mother intervenes. Mira feels jealousy and insecurity from her mother and Sri’s strange intimacy, creating an awkwardly heavy rift between them... The film examines how traditional values in an Indian society, particularly the shades of patriarchy, affect women’s lives to this day, while drawing close attention to the escalating tension of the mother and daughter’s mind game. Without glorification or critique, the camera captures fleeting moments of intimacy, self approval, betrayal and forgiveness. The film premiered at Sundance Film Festival’s World Cinema Dramatic program, winning the Special Jury Prize for Preeti Panigrahi’s performance, along with the Audience Award.

Director’s Biography

Shuchi Talati is a filmmaker from India whose work challenges dominant narratives around gender, sexuality, and South Asian identity. Her feature film, “Girls Will Be Girls”, will premiere in competition at the Sundance Film Festival. “Girls Will Be Girls” has been a recipient of Aide Aux Cinémas du Monde and Sorfond grants, and the ArteKINO and VFF Talent Award at the Berlinale Co-Production Market. It has also been selected for Gotham Week, Berlinale Script Station and Cine Qua Non Script Lab.

Her short film, “A Period Piece”, about an afternoon of period sex, was selected for SXSW. Another short film, “Mae and Ash” won numerous awards before becoming a Vimeo Staff Pick.

Shuchi is an alum of Berlinale Talents and her work has also been recognized by the New York State Council for the Arts and Région Île-de-France.

She is a graduate of the American Film Institute. She lives in New York City and is a member of the Brooklyn Filmmakers Collective, the Bitchtra Collective and the Freelance Solidarity Project.

Director’s Statement

Girls Will Be Girls is set in a conservative boarding school, much like the school I attended, where girls are policed, ostensibly to protect their ‘virtue.’ Male sexuality is allowed to express itself, sometimes in aggression towards girls; while we’re instructed to be submissive and ashamed of our bodies.

Despite this, I saw fierce, funny girls and women all around who subverted and circumvented the social and moral codes. In Girls Will Be Girls, I wanted to write about these subversive women who populated my life but never my screens and to expand the narratives that are available to Indian women.

Films from India (and the west) often erase real female bodies. Breasts and butts are hypersexualized, but masturbation, menstruation, vaginas, etc. are treated with revulsion or embarrassment. This erasure is a part of the way girls are trained to be invisible in a world that’s afraid of their sexuality, identity and voice. But Mira (aged 16) and her mother Anila (aged 38) are embodied beings with secretions and desires. Mira examines her vagina in a mirror, masturbates by rubbing up against a teddy bear, and plans her first time having sex. Anila shuns the self-sacrificing, asexual roles mothers are relegated to. She envies her daughter’s youth and boyfriend and pursues her desires with fervor. Both mother and daughter are outspoken, subversive characters who emerge defiant, if not necessarily triumphant.

The film is set in the late 1990s, when the Indian economy was opened up to western exports. This sparked fierce culture wars between debauched ‘westernness’ and virtuous ‘Indianness’.

Women’s bodies became battlegrounds in the war and women in miniskirts or with sexual agency became symbols of corruption. Unfortunately, this is still scarily resonant in many parts of the world today.

Though the film is rooted in the 1990s in India and is a close observation of gender roles, sexuality and oppressive patriarchy, I’m not interested in a grand thesis statement or preaching about social issues.

It’s very important to me that Mira and Anila are not defined by their identities as Indian women and that they don’t have to become stand-ins for their community. I want to allow them their full range of humanity: to be in love, experience disillusionment, envy and grief, and to represent only their peculiar and singular selves, not their full cultures. Because this is how their stories will also be universal - a luxury mostly reserved for characters from dominant cultures.

東京フィルメックス・コンペティション

11.23 (Sat.) 21:00 / 11.28 (Thu.) 15:15

ベトナム

Viet and Nam

Vietnam, Philippines, Singapore, France, Netherlands, Italy, Germany, USA / 2024 / 129min



作品解説

ベトナムは20代の炭鉱労働者の青年。彼らは粉塵まみれの画一的な職業生活を送りながら、地下何百メートルの暗闇の中で密かな愛を育んでいる。彼らは共に戦争で父を亡くしており、ナムと彼の母は父のベトコン時代の古い同志バと共に、まだ半分埋まった兵器が点在する森に覆われた中央高原へ父の遺骨を探す旅に出る。ベトは彼らに同行しつつ、ベトナムから密航し国外へ脱出することを計画しているナムの身を案じている……。20年に及ぶ戦争による深い傷がまだ色濃く残る2001年のベトナムを舞台に、恋人同士である二人の炭鉱労働者の姿を通して、戦後のベトナムにおいて、若くしてクィアであること、そして更にはベトナムという国そのものが抱える困難と苦悩を描く。催眠術のように優しく官能的に撮影された美しい作品でありつつも、その表層の下に眠る深く暗い影の部分を炙り出そうとする象徴性に満ちた作品。長編2作目『樹上の家』(19)で注目を集めた新鋭チューン・ミン・クイの3作目の長編である本作は、カンヌ映画祭のある視点部門で初上映された。



監督

チューン・ミン・クイ
TRUONG Minh Quy

ベトナムの中部高原の小さな町、パンメトート出身。あちこちに住みながら活動し、故郷の風景や子供の頃の記憶、ベトナムの歴史的な文脈を引き出しながら、記憶と現在の瞬間の中で、ドキュメンタリーとフィクション、個人的と非個人的の中間的な物語や映像を制作している。映画作品においては、現実的な即興と抽象的な概念やイメージを組み合わせる実験を行ってきた。2012年に釜山映画祭アジアン・フィルム・アカデミーに、2016年にベルリン映画祭ベルリナーレ・タレンツに参加。これまでの作品はロカルノ、ニューヨーク、クレルモン・フェラン、オーバーハウゼン、ロッテルダム、釜山といった映画祭やLes Rencontres Internationales Paris&Berlinの展示にも出品されている。長編第2作目『樹上の家』は第72回ロカルノ映画祭に出品され、Mubiに『映画祭でプレミアされた優れた3本の映画』と評される。同作は第57回ニューヨーク映画祭、ウィーン映画祭、ナント三大陸映画祭、ロッテルダム映画祭、CPH:DOX、ヨーテボリ映画祭などに出品。2021年、フランス語短編作品[Les Attendants]がベルリン映画祭短編コンペティション部門に出品。2024年、カンヌ映画祭ある視点部門にて長編第3作となる『ベトナム』が上映された。

Notes

Two miners in their twenties, Viet and Nam. Their work lives are dusty and uniform, although hundreds of meters below in the dark they nurture a secret love. Their fathers both lost to war, Nam sets out with his mother and Ba, an old Viet Cong buddy of his father's, to seek out his father's remains in the forest of the Central Highlands, scattered with half-buried weapons. Viet goes with them, partly out of apprehension over Nam's plan to stow away and sneak out of the country. Set in Vietnam in 2001, when the deep scars of the twenty years of war were still raw, the film portrays through the story of two miners in love the struggles and anguish of being young and queer in postwar Vietnam, as well as the challenges faced by the country itself. An exquisite film, filmed with an entrancing, subtle, and evocative quality, it is also rich in symbolism that aims to reveal the profound, hidden depths that lie beneath the surface. This is the second feature film by Truong Minh Quy, who garnered acclaim for his debut film, "Treehouse" (2019). This film premiered in the Un Certain Regard section at the Cannes Film Festival.

Director's Biography

Truong Minh Quy was born in Buon Ma Thuot, a small city in the Central Highlands of Vietnam. Quy lives and works, here and there, in the vibrancy of memories and present moments, his narratives and images, lying between documentary and fiction, personal and impersonal, draw on the landscape of his homeland, childhood memories, and the historical context of Vietnam. In his films, he has experimented with combining abstract concepts-images with realistic improvisations during shooting. He is the alumnus of 2012 Asian Film Academy (Busan International Film Festival) and 2016 Berlinale Talents (Berlin International Film Festival). His films have been selected for international film festivals and exhibitions such as Locarno, New York, Clermont-Ferrand, Oberhausen, Rotterdam, Busan, Les Rencontres Internationales Paris / Berlin. His second feature film, The Tree House, premiered in 72nd Locarno Film Festival (Filmmakers of The Present Competition), where it was called as "Three of the festival's best premieres" by Mubi. The film continued to screen in 57th New York Film Festival (Projection), Viennele, Festival Des 3 Continents (Competition), Rotterdam International Film Festival (Bright Future Main Program), CPH:DOX (Artist & Auteur), Goteborg International Film Festival, and others. In 2021, his French language film Les Attendants, competed for the Berlinale Golden Bear shorts. In 2024, Quy premiered his third feature film, Viet and Nam, at the Festival de Cannes in Un Certain Regard.

東京フィルメックス・コンペティション

11.25 (Mon.) 18:25 / 11.27 (Wed.) 10:00

黙視録

Singapore, Taiwan, France, USA / 2024 / 126 min



作品解説

家族でのピクニックのビデオ映像をじっくりと見ている若い父親。すぐに彼の幼い娘が行方不明になっているということが分かる。このビデオは、若い両親が持っている娘の最新の映像のようだ。程なくして、行方不明の娘の映像が入ったDVDが家族の玄関先に届き始める。誰かがこの家族を長い間監視しており、おそらく娘を取り戻す鍵を握っていることが明らかになる……。ヨー・シュウホアの『幻土』に続く新作長編『黙視録』は、こうして犯罪スリラーとして幕を開ける。シンガポール警察が所有する膨大な数のCCTV映像が駆使され、比較的あっけなく事件は解決するのだが、すでにその頃にはこの作品はスリラーの枠組みをあっさりと超え、現代の孤立と監視文化についての、巧妙で、陰鬱で、瞑想的で、最終的には不可解さを含んだより多層的な物語へと変質を遂げている。大量監視の時代に見る、見られるということはどういうことなのか。私たちの身近にあるこの大きな問いを考察することで、この作品は人間の孤独や脆さを見つめている。ヴェネチア映画祭コンペティション部門で上映。



監督

ヨー・シュウホア
YEO Siew Hua

2018年の監督作『幻土』は第71回ロカルノ映画祭で最高賞である金豹賞を受賞し、第92回アカデミー賞にシンガポール代表としてエントリーされ、第56回金馬獎で最優秀脚本賞を受賞した。

また、長編ドキュメンタリーシリーズ『THE OBS: A SINGAPORE STORY』のヘッドライターとして参加。ニー・アン・ポリテクニックで映画について学び、シンガポール国立大学で哲学を学んだ。

メッセージ

公園である男を見かけた。別に目立つてもいなかったシニアの方だが、私は何故か彼を眺めながら勝手に物語を作り始めた。そして私ははっと気づいた。彼のために作ったつもりは物語は実は私の願望に過ぎず、私は密かに自分を彼に投影して喜んでいたのだ。だが次の瞬間我に返り改めて周囲を見回すと、私は監視カメラの視線に囲まれていた。私も最初からずっと誰かに見られていたのだ。誰が見られていることは、もはや世の常なのである。コロナ禍以来、「監視」について議論すれば必ず持ち出されるテーマはいつの間にか「自由」からひっそりと「社会的責任」云々が変わっていた。画面に表示される単なる画像として存在するというのは、一体どういうことだろう。他人を「見る」とときに、私たちはパターンやレッセルを見越し、彼らをそれぞれの主体性、過去や物語を持つ真の人として見られているのだろうか？時々、私は自分が冷たい機械に監視されるより、人間に監視される方に懐かしささえ感じてしまっているのではないかと疑うこともある。およそシンガポールのような小さな島国に「グリッド外」という場所は存在せず、誰もが常に「見ている」し「見られている」のである。高密度な人口と遍在する監視が、我々を他人の生活の自覚無き目撃者役に作り上げてしまっていて、この目撃者という役目がさらにこの国の諸々の風土を誰も予期せぬ形で形成しているであろう。とりわけ、こうした「相互に見る見られる」の関係が我々の行動や自己認識にどう影響しているのかは興味深い。見てしまった以上、見ていないことにはもはやできないのだ。今の時代は、新しい娯楽消費手段によって人々の繋がりが無限に広がる一方で、同時に孤立感を感じさせる時代とも言える。『黙視録』は、このような時代における種々の疑問及び「見る」と「見られる」の関係についての一試論である。自発的なSNS投稿を通じて自己の存在を確認し、社会全体の安心安全のために監視を規範的なものとして受け入れる中で、我々の「常に見られている」という意識が、レンズの端に向こう側で私たちのアイデンティティを形作っている。結局、「見る」という行為は決して受動的ではなく、人間に反省を促し、変化をもたらす力を持つ過程でもあり、本来穏やかなアイデンティティを崩壊に導く可能性を秘めている危険な模倣ゲームとも言える。

脚本・監督 ●ヨー・シュウホア **プロデューサー** ●フラン・ボルジア、ステファノ・チェンティニ、ジャン・ローラン・スイニディス、アレックス・シー・ロ **エグゼクティブプロデューサー** ●フラン・ボルジア **共同プロデューサー** ●ダン・コー、ジェローム・ヌネス **共同エグゼクティブプロデューサー** ●グレン・ゴエイ、タン・ビー・ティアム **アシリエイトプロデューサー** ●ニコラ・ブリゴー＝ロペール、デニス・ヴァスリン **ラインプロデューサー** ●タン・アイ・レン、チック・メイビス・クアン **撮影監督** ●浦田秀穂 **プロダクションデザイナー** ●ジェームズ・ペイジ **衣装デザイナー** ●メレディス・リー **編集** ●ジャン・クリストフ・ブージー **音響監督** ●トウ・デュエー、トウ・ツーカー **音楽作曲** ●トーマス・フォゲーン **出演** ●ウー・チェンホー、リー・カンシヨウ、アニッカ・パンナ、ヴェラ・チェン、テオ・ゼン・ビート、クセニア・タン、マリアン・ン・ウウ、アーニャ・チョウ **Written and Directed by** ●Yeo Siew Hua **Produced by** ●Fran Borgia, Stefano Centini, Jean-Laurent Csinidis, Alex C. Lo **Executive Producers** ●Fran Borgia **Co-Producers** ●Dan Koh, Jerome Nunes **Co-Executive Producers** ●Glen Goei, Tan Bee Thiam **Associate Producers** ●Nicolas Brigaud-Robert, Denis Vaslin **Line Producers** ●Tan Ai Leng, Chicky Mavis Kuang **Director of Photography** ●Hideho Urata **Production Designer** ●James Page **Costumer Designer** ●Meredith Lee **Editor** ●Jean-Christophe Bouzy **Supervising Sound Editors** ●Tu Duu-Chih, Tu Tse-Kang **Music Composer** ●Thomas Fogueunn **Cast** ●Wu Chien-Ho, Lee Kang-Sheng, Anicca Panna, Vera Chen, Pete TeoEO, Xenia TanAN, Maryanne Ng-Yew, Anya Chow

白衣蒼狗

Mongrel(白衣蒼狗)

Taiwan, Singapore, France / 2024 / 128 min



作品解説

タイからの不法移民の青年オームは台湾の山岳地帯の田舎町で老人や障害者たちの介護の仕事をしている。東南アジア各地からの不法移民たちを闇で働かせているボスの下、移民労働者たちの仲介役でもある彼は、ボスと移民たちとの間で板挟みになることも多い。そしてある日、彼が介護をしている老女から、重度の障害を持つ彼女の息子について、ある相談を持ち掛けられる……。現代の奴隷制度ともいえる環境の中で暮らす移民労働者たちの絶望的に悲惨な状況や、彼らの直接のボスよりもさらに上の階層の闇社会の権力によって構築された搾取のシステムの在り方が、説明を極力排した厳密な筆致で描かれていく。フレーム内外で見事に制御された絵画的な構図や、長い沈黙を恐れない編集のリズムの調整も秀逸で、長編監督1作目にして見事な完成度に達している。ホウ・シャオシェンとリャオ・チンソン(ホウ作品の長年の編集者)が製作者として参加。カンヌ映画祭の監督週間で初上映され、初長編作品を対象としたカメラドールのスペシャル・メンションを授与された。



監督

チャン・ウェイリヤン
CHIANG Wei Liang

シンガポール出身。南洋理工大学でコミュニケーション学の学士号を取得し、国立台北芸術大学で映画演出の修士号を取得。過去10年間、台湾を拠点に活動し、現代アジアにおける東南アジア人の移民やディアスポラに焦点を当てた作品を制作している。

短編監督作品「Anchorage Prohibited」で、第66回ベルリン映画祭でアウディ短編映画賞を受賞。短編作品「Nyi Ma Lay」や、第76回ヴェネチア映画祭に出品されたVR短編映画「Only The Mountain Remains」は、移民の困難な生活をテーマにしており、これまでの批判的な視点を引き継いでいる。

また、タレント・トーキョー、ロカルノ映画祭フィルムメイカース・アカデミー、FIDキャンパス、そしてゴールデン・ホース・フィルム・アカデミーの修生生であり、台湾の名匠であるホウ・シャオシェン監督の指導も受けている。「白衣蒼狗」は初長編監督作品である。

メッセージ

「白衣蒼狗」のような物語は、世界のどこでも起こり得るものです。この10年間、私は主に無許可の移民労働者が直面する不安定で見えにくい生活に焦点を当てて作品を制作してきました。

「白衣蒼狗」はフィクションではありますが、台湾において私自身が経験した出来事や、東南アジアコミュニティで出会った数多くの人々の物語に基づいています。この作品には、私にとって非常に個人的な2つのテーマが込められています。それは、終末期ケアがケア提供者に与える身体的および精神的な負担、そしてそのケア提供者が移民である場合、その負担がさらに増すということです。

医療へのアクセスが限られた農村地域では、違法なケア提供者が最後の頼みの綱となります。彼らの多くはタイ、インドネシア、ベトナム、フィリピンから来ており、医療の専門家ではなく、日常生活の支援や患者の基本的な身体的ニーズを管理する役割を担っています。これらの移民ケア提供者は、多くの場合、雇い主である家族以上に患者に近い存在となることがありますが、それでもなお家庭内では「異邦人」として扱われます。

脚本 ●チャン・ウェイリヤン 監督 ●チャン・ウェイリヤン、イン・ヨウチャオ 撮影監督 ●マイケル・キャブロン プロダクションデザイナー ●イエ・ツウェイ 編集 ●ドゥアン・シヨフ カラーリスト ●ヨブ・ムーア サウンドデザイナー ●R.T.カオ、リム・ティン・リ MPSE エグゼクティブプロデューサー ●ホウ・シャオシェン、リャオ・チンソン、ジェニファ・ジャオ プロデューサー ●ライ・ウェイジェ、リン・チェン、チュー・ユンティン 共同プロデューサー ●マリー・デュバス、エリザベス・ウィジャヤ 出演 ●ワンロップ・ルンカムジャッド、ルー・イーチン、ホン・ユーホン、ウォ・シュウエイ、アチャラ・スンワン Written by ●Chiang Wei liang Directed by ●Chiang Wei liang, Yin You Qiao Director of Photography ●Michael Capron Production Designer ●Ye Tzu-Wei Editor ●Dounia Sichov Colorist ●Yoo Moor Sound Designers ●R.T.Kao, Lim Ting Li Mpsse Executive Producers ●Hou Hsiao-Hsien, Liao Ching-Sung, Jennifer Jao Producers ●Lai Weijie, Lynn Chen, Chu Yun-Ting Co-Producers ●Marie Dubas, Elizabeth Wijaya Cast ●Wanlop Rungkumjad, Lu Yi-Ching, Hong Yu-Hong, Kuo Shu-Wei, Atchara Sunwan

空室の女

Some Rain Must Fall(空房間裡的女人)

China, USA, France, Singapore / 2024 / 98 min



作品解説

40代の主婦、ツアイは人生の目的を失い、大きな精神的崩壊の瀬戸際にいる。映画の冒頭で、彼女は不運な形で年配の女性に怪我を負わせてしまい、入院したその女性の家族から賠償を求められる。この出来事を導入として、私たちは彼女の置かれている状況を目にしてい。夫とは離婚手続き中で、反抗期の娘との間にも深い溝がある。同居中の義母はどうやら認知症を患っており、疎遠になって久しい実父は死期が近いようだ。彼女は、自分の上へのしかかる重荷や憂鬱から逃れようともがいている。この作品は、こうしたツアイの「中年の危機」的状況、ひいては中国の中流階級家庭の機能不全を、4:3の息苦しいフレーミングと撮影監督のコンスタンツェ・シュミットによる美しく憂鬱なイメージによって極めて効果的に語る。映画初出演だという主演のユー・アイアルの抑えた演技も素晴らしい。カンヌ映画祭の短編部門でパルムドールを受賞した「A Gentle Night」(17)等、一連の短編作品で高い評価を得ていた新鋭チウ・ヤンの長編デビュー作。ベルリン映画祭エンカウンターズ部門で初上映された。



監督

チウ・ヤン
QIU Yang

中国常州市で生まれ育ち、オーストラリアのビクトリア芸術大学にて映画演出を学ぶ。短編監督作「She Runs」は第58回カンヌ映画祭批評家週間にて最優秀短編作品賞を受賞。また、短編作「A Gentle Night」は第70回カンヌ映画祭で上映され、最優秀短編作品賞を受賞。

長編デビュー作である「空室の女」はベルリン映画祭エンカウンターズ部門にて上映された。

Notes

40-year-old housewife Cai lost her aim of life and stands on the edge of a mental breakdown. In the beginning of the film, she inadvertently injures an elderly woman and is asked for compensation by the woman's family after she is hospitalized. From this event we start to see her circumstances - Cai is in the middle of divorcing her husband, and has a deep rift with her rebellious daughter. Her mother-in-law who cohabits with her, seems to suffer from dementia and her long estranged father is on his deathbed. She is floundering from the weight of the burden and depression. The film effectively tells Cai's midlife crisis situation and the dysfunction of a middle class Chinese family in a suffocating 4:3 framing and beautifully melancholy imagery by cinematographer Constanze Schmitt. The star Yu Aier's performance in her debut film is also fantastic. Winner of the Cannes Film Festival Short film programme Palme d'Or, Qiu Yang's debut feature follows critical acclaim on a series of short films, including "A Gentle Night" (2017), which won the Palme d'Or for Best Short Film at the Cannes Film Festival. The film premiered at the Berlin International Film Festival Encounters section.

Director's Biography

Qiu Yang was born and raised in Changzhou, China. He studied film directing at the Victorian College of the Arts in Australia. His latest short film "She Runs" won the Leitz Cine Discovery Prize for best short film at the 58th Cannes Critics' Week. "A Gentle Night" was awarded the Short Film Palme d'Or at the 70th Cannes film Festival. His first feature film, "Some Rain Must Fall", will premiered at Berlin in Encounters.

脚本・監督 ●チウ・ヤン 撮影監督 ●コンスタンツェ・シュミット 編集 ●カルロ・フランシスコ・マナタッド、ジュリアン・ラシュレー プロダクションデザイナー ●シャン・インハオ 衣装デザイナー ●チャン・ヤディ 音楽作曲 ●ライアン・サマーヴィル サウンドデザイナー ●メイ・ジュ、ロマン・オザンヌ、エマニュエル・クロゼ キャスティング ●カン・カン プロデューサー ●ジェレミー・チュア、マイク・グッドリッジ、アレックス・C・ロ、メリッサ・マランバウム、リン・ファン、ダーシー・シー・ワン 共同プロデューサー ●ドゥオ・リン、シェン・シリヤン、フランク・サン、シャン・インハオ、ローレン・ユエ・パン、ソル・イエ、ワン・ヤン エグゼクティブプロデューサー ●アレックス・C・ロ、ヤン・シャオドン、ホアン・ユエ、スター・リー、レイチェル・ソン、クアイ・ハオジャン、シャン・イーガン、イン・ヤン セールスエージェント ●Goodfellas 出演 ●ユー・アイアル、ディ・シーケ、ウェイ・イーボ、シュー・ティエンイ、グー・ティンシウ、チン・ダン、シュ・ユン、ツァオ・ユーチアン Written and Directed by ●Qiu Yang Director of Photography ●Constanze Schmitt Editor ●Carlo Francisco Manatad, Julien Lacheray Production Designer ●Shan Yinghao Costume Designer ●Zhang Yadi Music composer ●Ryan Somerville Sound Designers ●Mei Zhu, Romain Ozanne, Emmanuel Crosot Casting ●Kang Kang Producers ●Jeremy Chua, Mike Goodridge, Alex C. Lo, Mélissa Malinbaum, Lin Fan, Darcy Xi Wang Co-Producers ●Duo Lin, Shen Siliang, Frank Sun, Shan Yinghao, Lauren Yue Pan, Sol Ye, Wang Yang Executive Producers ●Alex C. Lo, Yang Xiaodong, Huang Yue, Star Li, Rachel Song, Kuai Haoxiangs, Shan Yigang, Ying Yan Cast ●Yu Aier, Di Shike, Wei Yibo, Xu Tianyi, Gu Tingxiu, Qin Dan, Xu Yun, Cao Yuqiang Sales Agent ●Goodfellas

TOKYO FILMeX 2024 Special Screenings

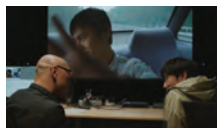
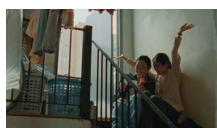
会場：丸の内TOEI、ヒューマントラストシネマ有楽町

Venue: Marunouchi TOEI, HUMAN TRUST CINEMA Yurakucho

今年も映画の最先端を切り拓いてゆく、著名監督たちのとびきりの新作をご紹介します。いずれも強烈な作家性が発揮された、これらのバラエティ豊かな作品からは、映画の多彩さがうかがえるでしょう。

This year, we once again bring you a selection of extraordinary new works from spirited filmmakers on the cutting edge of cinema.

These abundantly diverse films, each exhibiting powerful originality, epitomize the eclectic nature of film.



P17 ● 新世紀ロマンティクス / ジャ・ジャンクー
Caught by the Tides China / Director: JIA Zhang-Ke

P18 ● スユチョン / ホン・サンス
By the Stream South Korea / Director: HONG Sangsoo

P19 ● ブルー・サン・パレス / コンスタンス・ツァン
Blue Sun Palace USA / Director: Constance TSANG

P20 ● 愛の名の下に / エリザベス・ロー
Mistress Dispeller China, USA / Director: Elizabeth LO

P21 ● ボル・ポトとの会合 / リティ・パン
Meeting with Poi Pot France, Cambodia, Taiwan, Qatar, Turkey / Director: Rithy PANH

P22 ● 無所住 / ツァイ・ミンリャン
ABIDING NOWHERE Taiwan, USA / Director: TSAI Ming-Liang

P23 ● 何処 / ツァイ・ミンリャン
Where Taiwan / Director: TSAI Ming-Liang

P24 ● 未完成の映画 / ロー・イエ
An Unfinished Film Singapore, Germany / Director: LOU Ye

P25 ● スホ / アストリッド・ロンデロ & フェルナンダ・バラデス
Sujo Mexico, USA, France / Director: Astrid RONDERO & Fernanda VALADEZ

P26 ● 地獄に落ちた者たち / ロベルト・ミネルヴィーニ
The Damned Italy, Belgium, USA, Canada / Director: Roberto MINERVINI

P27 ● ザ・ゲスイドウス / 宇賀那健一
The GESUIDOUZ Japan / Director: UGANA Kenichi

11.23 (Sat.) 18:20

新世紀ロマンティクス

Caught by the Tides (風流一代)

China / 2024 / 111min / 配給：ビターズ・エンド



© 2024 X Stream Pictures

作品解説

ジャ・ジャンクー監督の長年のミューズであるチャオ・タオ演じる一人の女性の人生の約20年間を、彼女の元を去った一人の男性との関係を軸に描いた作品。物語は2001年に始まり、最初は5年後、次には16年後に時代が移行し、2022年を舞台とする第3章までを通して、主人公女性の感傷的な苦難と、時の経過と共に彼女の自立が深まっていく姿が捉えられている。冒頭の場面は2001年頃に撮影され、映画の終盤に主人公たちが再び大同市に戻る頃には、この古い炭鉱都市が未来への可能性に開かれた完全に別の世界になっているのが印象的だ。最初の2章は過去に様々なフォーマットで撮影された未使用の映像素材が多くの場面で使われており、サウンド版サイレント映画の形式が部分的に採用され、ポップ、ディスコ、伝統音楽等のサウンドトラックに支えられた流動的な編集がなされている。そうしたユニークなハイブリッド映像 / 音響が各時代の集合的記憶のようなものを喚起させていく様は実に感動的だ。カンヌ映画祭のコンペティション部門でワールドプレミア上映された。



監督
ジャ・ジャンクー
JIA Zhang-Ke

1970年生まれ、中国山西省・汾陽（フェンヤン）出身。93年に北京電影学院文学系（文学部）に入学。初長編作『一瞬の夢』が98年ベルリン国際映画祭フォーラム部門でワールドプレミア上映され、ヴォルフガング・シュタウテ賞（最優秀新人監督賞）を受賞したほか、釜山国際映画祭、バンクーバー国際映画祭、ナント三大陸映画祭でグランプリを獲得、国際的に大きな注目を集めた。06年、三峡ダム建設により水没する古都・奉節（フォンジェ）を舞台にした『長江哀歌』がヴェネチア国際映画祭金獅子賞（グランプリ）を受賞。

メッセージ

2001年以来、私は大同をたびたび訪れ、その時々に使っていたカメラで大同を撮影してきました。大同は炭鉱の街として有名でしたが、私が足を運ぶ始めた頃には炭鉱は枯渇し、炭価も下がりはじめました。しかし、中国経済は急速に開放され、新しい活力がいたるところで見られました。私は歌う群衆をカメラで捉えました。ダンスたちと一緒に飛び回り、若者たちを彼らのお気に入りの場所まで追いかけてきました。手にしたカメラは、未知の喜びで溢れかえっていました。その後、20年間、私は何度も同じ人々を追いかけてきました。長江の三峡や南端の珠海、中国の東北部や南西部まで。彼らが年を重ねるにつれて、私が携えるカメラも、シンプルなDVからAlexa、そしてVRへと進化していきました。編集室で、私はよく、この長年にわたって撮影してきた映像を見返しました。記録された時間が過ぎかかっていくのを感じながら、映像が遠ざかっていく。過去の楽しい時間は、まるで夢のようでした。これまでずっと、私はこの映像の根底にある相互のつながりを探してきました。撮影を始めてから20年という時間の中で、ストーリーがひとつになっていくのを見つけたのは、2022年のコロナによるロックダウンの時でした。私が衝撃を受けたのは、この映像には、直線的で因果関係のあるパターンがないことでした。その代わりに、そこには、もっと複雑な関係があり、量子物理学のようなものではなく、人生の方向性は、特定するのが難しい変動要因に影響され、最終的に決定されているのです。私は中国語タイトルを、映画に登場する世代に名前をつけました。『風流一代』の文字通りの意味は「漂流世代」ですが、「風流」という言葉には強くロマンチックな意味合いがあります。カメラは、私たちが忘れてしまったと思っていたものを捉え、それらが今の私たちを作り上げているのです。

出演 ● チャオ・タオ、リー・チュウピン、パン・ジアンリン、ラン・チョウ、チョウ・ヨウ、レン・クワン、マオ・タオ 配給 ● ビターズ・エンド
Cast ● Zhao Tao, Li Zhubin, Pan Jianlin, Lan Zhou, Ren Ke, Mao Tao Distribution in Japan ● Bitters End

Notes

Starring Jia Zhang-Ke's longtime muse Tao Zhao, the film depicts two decades of a woman's life centered on her relationship with a man who left her. Beginning in 2001, the story captures the sentimental tribulations of the woman and her growing independence as time passes - shifting between periods from 5 years, then 16 years, until chapter 3 set in 2022. The opening scene was shot around 2001, and by the time the protagonists return to Datong city at the end of the film, this old mining town has become a completely different world, open to the possibilities of the future. The first two chapters of the film utilized unused footages shot in various formats from the past, partially referencing the sound-era silent film format, and the fluid editing style is supported by soundtracks of pop, disco, and traditional music. This unique hybrid moving image and sound astonishingly brings back collective memories from each era. The film world premiered in the Competition program at the Cannes Film Festival.

Director's Biography

Jia Zhang-Ke was born in Fenyang, Shanxi, in 1970 and graduated from Beijing Film Academy. His debut feature "Xiao Wu" won prizes in Berlin, Vancouver and elsewhere. Since then, his films have routinely premiered at major European festivals. "Still Life" won the Golden Lion in Venice in 2006, "A Touch Of Sin" won the Best Screenplay prize at Cannes in 2013 and "Mountains May Depart" and "Ash Is Purest White" were in competition in Cannes 2015 and 2018. Several of his films have blurred the lines between fiction and documentary.

Director's Statement

I'd been traveling to Datong often since 2001, and filming the city with whatever camera I was using at the time. Datong was renowned as a coal-mining city, but by the time I began spending time there the mines were becoming exhausted, and coal-prices were dropping. But China's economy was rapidly opening up, and a new vitality was on display everywhere I looked. I captured singing crowds with my camera. I swirled with the dancers. I followed the young people to all their favorite places. The camera in my hand overflowed with unknown pleasures. Over the following twenty years I've followed some of those same people now and again, tracking them to the Three Gorges on the Yangtze River, to Zhuhai in the far south, to China's north-east and south-west. As they have grown older, the cameras I've carried have also evolved: from simple DV to Alexa and to VR. In my editing room I've often looked back at the footage I've shot over the years. The images grow distant as I can feel the times they record slipping away. Good times in the past become almost dream-like. All this time, I've looked for the underlying interconnections in this footage. It was only in 2022, during the Covid lockdowns, that I found the stories coming together within the frame of the two decades since I started filming it. It struck me that the footage had no linear, cause-and-effect pattern. Instead, there was a more complex relationship, not unlike something from quantum physics, in which the direction of life is influenced and ultimately determined by variable factors that are hard to pinpoint. I gave the generation shown in the film a name when I chose the Chinese title: the literal meaning of Feng Liu Yi Dai might be "A Drifting Generation", but the term Fengliu (literally, "Wind and Waves") has a strong romantic connotation. The camera has captured things we thought we'd forgotten, but they are the things which made us what we are today.

スユチョン

By the Stream

South Korea / 2024 / 111min



© 2024 Jeonwonsa Film Co. All Rights Reserved.

作品解説

ソウルの女子美術大学を舞台にしたこの映画は、もうそれほど若くはない大学講師のジョンイムが、かつてはその分野で有名だった叔父のチュ・シオンに大学の演劇祭で学部の学生たちの寸劇を演出させようと大学に招へいするところから始まる。演劇祭の準備が始まり、その過程でシオンはジョンイムの上司で彼の大ファンである女性教授チョンと親しくなっていく……。本作は「A Traveler's Needs (英題)」に続く今年2作目のホン・サンス監督作品。登場人物たちが食事をし、酒を酌み交わす場面で重要なことが示唆されることが多いホン作品だが、この作品もその例に漏れず、川沿いにある鰻料理店で多くの進展や転回が起こる(また、川沿いの店ではないが、演劇祭の打ち上げの席で学生たちが独白する場面は不意に訪れる感動的なシーンだ)。ジョンイムは織機で繊細なパターンの織物を作る新進の芸術家であり、そのことがこの作品の主題の一つである演劇の考察と共に、作品にもう一つのレイヤーを与えている。ロカルノ映画祭のコンペティション部門で上映され、主演のキム・ミニが最優秀演技賞を受賞した。



監督

ホン・サンス
HONG Sangsoo

1960年、ソウル生まれ。韓国中央大学で映画制作を学んだのち、カルフォルニア芸術大学、シカゴ芸術大学で美術学士号、美術修士号を取得。その後フランスに渡り、シネマテーク・フランセーズなどに通い詰めた。韓国に戻り、96年に「豚が井戸に落ちた日」で監督デビュー。パンクパー映画祭、ロッテルダム映画祭などで受賞を果たす。2004年

の「女は男の未来だ」がカンヌ映画祭のコンペティション部門に初選出。「アバンチュールはパリで」(08)から「ヘウォンの恋愛日記」(13)までは7作連続で世界三大映画祭(カンヌ、ヴェネチア、ベルリン)に出品されるという快挙を成し遂げた。

メッセージ

さまざまなことについて多くの話がされる中、ジョンイムは小川のそばに座り、その流れのパターンをスケッチし、捉えようとしています。

Notes

Set in a women's art college in Seoul, this film begins with Jeonim, a university instructor who isn't so young anymore, inviting her once-famous actor-director uncle, Chu Sion, to direct a student skit for the university's theater festival. As preparations for the festival begin, Sion grows close to a female professor, Jeong, who is his biggest fan and also Jeonim's superior. This is Hong Sangsoo's second film this year, following "A Traveler's Needs." It follows his style of significant themes being suggested during scenes of drinking and eating, with much of the plot and pivotal moments occurring at a riverside eel restaurant. While not set at the restaurant, a scene of the students delivering monologues at the festival's wrap-up party also unfolds in a surprisingly poignant fashion. Jeonim is portrayed as an emerging artist creating delicate woven patterns on a loom, adding another layer to the film's central theme of theater. The film was screened in competition at the Locarno Film Festival, where lead actress Kim Minhee won the Best Acting Award.

Director's Biography

Born in 1960 in Seoul. After studying film at Chungang University, he acquired his fine arts bachelor's and master's degrees at California College of Arts, and the School of the Art Institute of Chicago. Then he traveled to France where he frequented the Cinematheque Francaise. Returning to South Korea, he made his directorial debut in 1996 with "The Day a Pig Fell Into the Well" which won awards at the Vancouver and Rotterdam international film festivals. 2004's "Woman is the Future of Man" was his first to be selected for the Cannes Film Festival's Competition Section.

Thereafter he achieved a remarkable accomplishment by having 7 consecutive films, from "Night and Day" (2008) to "Nobody's Daughter Haewon" (2013), screened at the three major international film festivals: Cannes, Venice, and Berlin.

Director's Statement

Much is being said about many different things, while Jeonim sits by a stream and tries to sketch and grasp the patterns of that stream.

ブルー・サン・パレス

Blue Sun Palace (藍色太陽宮)

USA / 2024 / 116min



作品解説

ニューヨークのクイーンズの中国式マッサージ店に住み込みで働くエイミーとディディ。彼女はディディの幼い娘が叔母と暮らしているボルチモアと一緒にレストランを開くことを夢見ながら、強固な姉妹的関係を築いている。一方、ディディは建設作業員として働きながら台湾の家族に送金している中年男性のチュンと付き合い始めており、彼と一緒に暮らすことも望むようになる。しかし、予期せぬ暴力行為が旧正月に彼らの生活に侵入すると、彼らの夢は脆くも崩れ去り、痛ましい不在が残される……。本作が初長編監督作となるコンスタンス・ツァン監督は、撮影監督ノーム・リーの力を借りて、この長引く悲しみをざらついた質感と陰鬱な映像で美しく表現する。沈黙が何よりも雄弁に物語を語り、移民であることの孤独、そしてかつて故郷と呼んでいた場所から遠く離れた時に家族やコミュニティのような存在がどれだけの意味を持つかを静かに訴えかけている。カンヌ映画祭の批評家週間で上映され、フレンチ・タッチ賞を受賞した。



監督

コンスタンス・ツァン
Constance TSANG

ニューヨークを拠点に活動する中華系アメリカ人の脚本家、監督、教育者である。彼女は最近、コロンビア大学で脚本・監督のMFAを取得し、ロバート・ゴア・リフカインド・ランチ基金を受賞した。彼女の短編映画「BEAU」は、修士論文のショーケースで業界パネルから選ばれ、全米監督協会の第26回学生映画賞(東海岸アジア系アメリカ人カテゴリ)で審査員賞を受賞した。「BEAU」は、メトログラフ、パームスプリングス短編映画祭、アウトフェスト、ブルックリン映画祭、ロサンゼルス・アジア太平洋映画祭、メルボルン・クィア映画祭などで上映され、現在はVimeoのStaff Picksで視聴可能。彼女の前作「CARNIVORE」は、2018年のAT&T Hello Labプロジェクトに選ばれた。この映画はDirect TVで初公開された後、Alterに買取された。彼女の作品は、スターライト・スターズ・コレクティブやトライブッカ映画祭から支援を受けており、「ブルー・サン・パレス」が彼女の初の長編映画となる。

メッセージ

「ブルー・サン・パレス」のルーツは、私が16歳の時に父を失ったことに遡ります。この映画の舞台でもあるフラスティングで私たちは暮らしていましたが、父が亡くなった後、母と私は引越しました。当時、私は悲しみをどう処理すればいいかわからず、私たちが家を去ったのと同じように、その悲しみも置き去りにしました。映画を書き始めたとき、私は過去と、かつてのコミュニティと再びつながりたいと思っていました。しかし、気が付かなかったのは、この物語が父との再会の手段であったということです。私は、大切な人を失った後に私たちが下す決断について考え始めました。特に、私たちが関わる人間関係や、必ずしも自分にとって正しい相手ではないと分かっているにもかかわらず、慰めを求める相手についてです。この映画を書き終えた頃、私は長年のパートナーと離婚することになりました。私の現実を感情的に反映した映画を書く過程は、私の記憶と願望を融合させました。悲しみが大きなテーマですが、家、安らぎ、愛も重要な要素です。今、「ブルー・サン・パレス」を観ると、それが私にとって何を意味するのかがかかるようになりました——それは、子供時代の亡霊たちへの手紙であり、アメリカに一つの夢を持って来て別の夢に落ち着いた両親への手紙であり、今や理解できる父への手紙であり、そして人生における喪失を再定義しようとしている私自身への手紙なのです。

脚本・監督・製作●ホン・サンス プロダクション・マネージャー●キム・ミニ プロダクション・アシスタント●キム・ヘジョン
サウンドレコーディスト●ソ・ジファン 撮影・編集・作曲●ホン・サンス ワールドセールス●FINECUT
出演●キム・ミニ、クワン・ヘヒョ、チョ・ユンヒ、ハ・ソングク、カン・ソイ、パク・ハンビツナラ、オ・ユンス、パク・ミン、イ・ギョミン、ハン・ヌリ、キム・ソンジ
Written, Directed and Produced by●Hong Sangsoo Production Manager●Kim Minhee Production Assistant●Kim Hyejeong Sound Recordist●Seo Jihoon Photographed, Edited, Composed by●Hong Sangsoo Production Company●JEONWONSA Film Co. Production
Cast●Kim Minhee, Kwon Haehyo, Cho Yunhee, Ha Seongguk, Kang Soyi, Park Hanbitnara, O Yoonsoo, Park Miso, Lee Kyoungmin, Han Nuri, Kim Sunjin
World Sales●FINECUT

脚本・監督●コンスタンス・ツァン プロデューサー●サリー・スジン・オー、エリ・ラスキン、トニー・ヤン 撮影監督●ノーム・リー C.S.C. プロダクションデザイナー●エバライン・ウー・ホアン
編集●ケイトリン・カー 音楽●サミ・ジャリ 衣装デザイナー●アヴァ・ユリコ・ハマ キャスティングディレクター●ケイト・アントニーニ 共同プロデューサー●ナビール・カーン、マルタ・クルアニアス・コンペス アソシ
エイトプロデューサー●ルー・ワン、ホルボーン、ルー・チャン
出演●ウー・カーシ、リー・カンジョン、シュー・ハイペン、ハン・シェミン、ジエン・リーシャ、レオ・チェン、ウー・チェンイン、ファン・グイピン、エイプリル・ワン、ジュ・ヤティン、ワン・リミン、ジャネット・シェ、リリー・ガオ、リン・シン、
ルー・チャン、フランラン、リー・ジンシア、ダミアン・ブラウン、ジェミー・ティアニー、ザカリ・ザムスキー、スー・シャオシャオ
Written & Directed by●Constance Tsang Producers●Sally Sujin Oh, Eli Raskin, Tony Yang Cinematography●Norm Li C.S.C. Production Designer●Evaline Wu Huang Editor●Caitlin Carr Music by
●Sami Jano Costume Designer●Ava Yuriko Hama Casting Director●Kate Antognini Co-producers●Nabeer Khan, Marta Cruañas Compes Associate Producers●Lou Wang-Holborn, Lu Zhang
Cast●Ke-Xi Wu, Lee Kang Sheng, Haixpeng Xu, Min Han Hsieh, Lisha Zhang, Leo Chen, Chengying Wu, Guiping Huang, April Wang, Yating Zhu, Limin Wang, Janet Hsieh, Lily Gao, Lynn Xiong, Lu Zhang, Ranran
Hu, Jinxia Li, Damien Brown, Jamie Terney, Zachary Zamsky, Xiaoxiao Sun

無所住

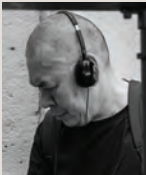
Taiwan, USA / 2024 / 79 min



Photo by Claude Wang

作品解説

マレーシア出身の台湾の巨匠ツァイ・ミンリヤンの演出、リー・カンジョンの主演による「行者(Walker)」シリーズの第10作目。9作目の『何処』に続き、アノン・ファンションも出演している。スミソニアン国立アジア美術館の委託を受けて制作された作品で、同美術館のあるワシントンDCの街やフリーア美術館を舞台に、有名な文学作品『西遊記』の着想源となった7世紀の仏僧玄奘(三蔵法師)の中国からインドへと至る巡礼の旅からインスパイアされた、非常にゆっくりとした修行僧の歩みが捉えられている。ベルリン映画祭のペルリナーレ・スペシャル部門で世界初上映された。



監督

ツァイ・ミンリヤン
TSAI Ming-Liang

1957年、マレーシアに生まれる。1992年、長編デビュー作『青春神話』(92)がベルリン映画祭でプレミア上映される。第2作『愛情萬載』(92)でヴェネチア映画祭金獅子賞を受賞し、ベルリン映画祭でも『河』(96)が審査員特別賞を受賞したことにより、メジャーな映画監督としての地位が固まった。今までの長編映画は全て世界三大映画祭で出品され、そのうち5作品はFIPRESCI賞を受賞。2009年、『ヴァイザー・ジュ』(09)はルーブル美術館に収蔵された初めての劇映画となった。

近年、ツァイは美術界からも注目を集め、様々な展覧会やフェスティバルへ招待されており、『Hand-sculpted Cinema』や『The removal of industrial process from art making』といった美的理念を提唱している。2012年に「行者」シリーズを開始し、完成された10作品は世界中のアートフェスティバルやギャラリーで上映された。一方、台湾ではツァイは『Art Museum as Cinema』、『The Author's Intended Way of Viewing』といったコンセプトを提唱し、過剰に商業化した映画産業とのバランスをとるための新しい映画の見方を紹介している。

メッセージ

「Walker」シリーズのコンセプトは、10年前に私が演出した演劇から生まれました。その中で、シャオカン(リー・カンジョン)がソロシーンの一部として、ゆっくりと歩くパフォーマンスを行いました。このシーンは美しく力強く、私の心を深く打ちました。そのため、私はこのパフォーマンスを映像作品として制作することを決めました。私は、シャオカンの外見をスタイリングしました。剃り上げた頭、裸足、そして赤いロープを纏った姿は、まるで苦行者のようです。このアイデアは、仏典を求めて中国からインドまで数千マイルの旅を歩んだ唐代の僧侶、玄奘の精神にインスパイアされたものです。私は、この現代版の玄奘が世界を歩き回ることができるかどうかを考えました。彼が歩く各地に映画にできるのではないかと考え、10年間で10本の映画を作ろうと思ったのです。彼が非常にゆっくりと歩いているため、観客は彼を見ながら、彼の周りの世界にも目を向けざるを得ません。観客は、この視点を通して世界をどう感じるのでしょうか。「Walker」シリーズは、2012年に始まりました。これまでに、10本の映画を制作するという目標を達成しました。ワシントンD.C.で制作された第10作目は、私にとってまるで夢のようです。

監督 ● ツァイ・ミンリヤン エグゼクティブプロデューサー ● ツァイ・ミンリヤン、ユー・ペイファ 共同エグゼクティブプロデューサー ● リー・シュービン、トム・ヴィック プロデューサー ● クラウド・ワン
ラインプロデューサー ● チェン・イー 撮影監督 ● ジョン・ユアン 衣装デザイナー ● ワン・チャー・ファイ 編集 ● ジョン・ユアン、チャン 音響デザイナー ● リン・ツァーシアン
共同制作 ● C35フィルムズ スチール写真撮影 ● クラウド・ワン グラフィックデザイナー ● ウィンダー・チェン タイトル書道 ● リー・カンシェン 英語翻訳 ● オン・チャオフン
プレゼンテーション ● スミソニアン協会、国立アジア美術館、台湾公共電視台基金会、ホームグリーンフィルムズ 製作 ● ホームグリーンフィルムズ 協力 ● 台湾文化部(中華民国)、国立アジア美術館
出演 ● リー・カンジョン、アノン・ファンション
Director ● Tsai Ming-Liang Executive Producer ● Tsai Ming-Liang, Yu Pei-Hua Co-Executive Producer ● Li Shu-Ping, Tom Vick Producer ● Claude Wang Line Producer ● Chen Yi
Director of Photography ● Jhong-Yuan Chang Costume Designer ● Wang Chia-Hui Film Editor ● Jhong-Yuan Chang Sound Designer ● Lin Zi-Xiang In Association With ● C35 FILMS
Still Photographer ● Claude Wang Graphic Designer ● Winder Chen Film Title Calligraphy ● Lee Kang-Sheng English Translation ● Ong Chao-Hung
Cast ● Lee Kang-Sheng, Anong Hounghuangy
Present by ● Smithsonian Institution's National Museum of Asian Art, Taiwan Public Television Service Foundation, Homegreen Films
With Support ● Ministry Of Culture, Taiwan (R.O.C.) & National Museum of Asian Art, A HOMEGREEN FILMS production

Abiding Nowhere(無所住)

Notes

The tenth title of the Walker series directed by the Taiwan-based Malaysian maestro Tsai Ming-Liang, starring Lee Kang-shen. Anong Hounghuangy also appears in this film, following his performance in the ninth film "Where" (2022). Commissioned by the Smithsonian Institution's National Museum of Asian Art, the film captures the very slow steps of an ascetic monk in sceneries of Washington D.C. and Freer Gallery of Art, inspired by the 7th century Buddhist monk Xuanzang's pilgrimage from China to India, which inspired the famous literary work "Journey to the West." The film had its world premiere at the Berlin International Film Festival Berlinale Special Section.

Director's Biography

Born in Malaysia in 1957, Tsai Ming-Liang premiered his debut feature, "Rebels of the Neon God", at the Berlinale in 1992. His sophomore film, "Vive L' amour" (1994), won the Golden Lion award at the Venice Film Festival while "The River" (1996) won the Jury Award at Berlin, thus solidifying his status as a major filmmaker. All of his feature films so far have been selected by the top three film festivals of the world while five of them have won the FIPRESCI Award. In 2009, "Face" became the first film to be included in the collection of the Louvre Museum's "Le Louvre s'offre aux cinéastes".

In recent years, Tsai has also received attention in the art world, having been invited to participate in various art exhibitions and festivals, and for putting forth such aesthetic ideas as the "Hand-sculpted Cinema" and "The removal of industrial processes from art making". In 2012, he began his "Slow Walk" series and has since completed 10 films, screened at art festivals and galleries around the world. Back in Taiwan, he actively promoted the concept of "Art Museum as Cinema" and "The Author's Intended Way of Viewing", introducing new film-watching modes as a way to balance the overly commercialized film market.

Director's Statement

The concept for the Walker series was born out of a play I did ten years ago, in which Hsiao Kang performed a slow walking segment as part of his solo scene. It was beautiful and powerful, and it touched me deeply. I therefore decided to turn this performance into a work of moving images.

I designed Hsiao Kang's look — shaved head, bare feet, red robes, like an ascetic. This idea was inspired by the spirit of Xuanzang, a Tang Dynasty monk who travelled thousands of miles on foot from China to India in search of Buddhist scriptures.

I wondered if this modern version of Xuanzang could walk around the world. I thought each location that he walks at could be a film. I could make ten films in ten years, perhaps more. When we observe the walker in these films, because he is walking so slowly, we can't help but also see the world around him. What would the viewer make of the world, seen through this way?

The Walker series began more than ten years ago in 2012. To date, I have realized my goal of making ten films. That the tenth film is made in Washington DC is like a dream to me.

何処

Taiwan / 2022 / 91min



Photo by Claude Wang

作品解説

2022年11月から2023年1月にかけてパリのボンピドゥー・センターにて開催されたツァイ・ミンリヤン監督の全面的なレトロスペクティブと展覧会「Une Quête」に合わせて制作された「行者(Walker)」シリーズの第9作。『日子』(20)に出演していたアノン・ファンションが行者役のリー・カンジョンと共に主演しており、パリの賑やかな街で行者と出会う自分自身を演じている。本作のプロデューサーによれば、ツァイ監督は「行者」10作目の『無所住(Abiding Nowhere)』と本作を姉妹作のように考えており、どちらかというとな本作の方が順番的には後に来るのだという。ボンピドゥー・センターの大きな空間の床に置かれた非常に大きな白いキャンバスのような布にアノンが木炭のようなもので何本もの線を描き、その脇を行者が非常にゆっくりと歩いていく。その動きの極度なスローさにも関わらず、両者の邂逅はとてもしりリングだ。



監督

ツァイ・ミンリヤン
TSAI Ming-Liang

P22を参照

メッセージ

行者を撮影することは、まるで屋外でスケッチを描くようなものです。

行者はパリにいて、アノンも同じくパリにいます。

彼らはただすれ違うだけで、他には何も起こりません。

ボンピドゥー・センターから、私の行者シリーズを展示したいとの申し出がありました。

そこで私は、この有名な現代美術館を撮影し、私の第9作目の行者シリーズに加えることにしました。

記憶として。

Where(何處)

Notes

The 9th film in the Walker series, produced in conjunction with Tsai Ming-Liang's extensive retrospective and exhibition "Une Quête" held at the Center Pompidou in Paris from November 2022 to January 2023. Following his performance in "Days" (2020), Anong Hounghuangy plays himself in this film where he encounters a pilgrim played by Lee Kang-shen in the bustling streets of Paris. According to the producer of this film, Tsai considers this and the 10th film of the Walker series "Abiding Nowhere" (2024) as sister films, and this film is intended to position later in the sequence. Anong Hounghuangy draws many lines with a charcoal on a very large white canvas-like cloth placed on the floor of the large space in Centre Pompidou, and the pilgrim walks very slowly beside him. Despite the extreme slowness of their movements, the encounter between the two is very thrilling.

Director's Biography

P22を参照

Director's Statement

Filming the walker is like making a sketch outdoors.

The walker is in Paris and so is Anong.

They pass each other, nothing else happens.

The Centre Pompidou wanted to exhibit my Walker films.

So I decided to film this famous contemporary art museum

and include it in my ninth Walker film.

For memory's sake.

未完成の映画

An Unfinished Film (一部未完成的電影)

Singapore, Germany / 2024 / 107min



©Yingfilms Pte. Ltd.

作品解説

2019年、物語は10年間電源が入っていなかったコンピューターが起動される場面から始まる。そこには放置された未完の映画が入っており、その映画の監督は主演俳優を呼び出し、制作の再始動を提案する。様々な理由で躊躇していたものの、2020年1月の春節を目前に撮影準備が始まると、主演俳優はクルーに合流している。彼らはすぐに制作に取りかかるが、程なくしてコロナ禍対策のためのロックダウンのニュースが広まり始め、何人かのキャストは荷物をまとめて去っていく。そしてすぐにホテル全体が強制的に封鎖され、主演俳優とクルーは各部屋に閉じ込められてしまう……。本作は、未完に終わったクワイア映画を完成させるために再集結した映画制作チームを描いたドキュフィクション作品。映画制作の過程とパンデミックを生き抜く過程が、感染拡大で制作が中断し、全員がホテルで隔離されるという場面で結び付けられる。そこからフィクションと現実の境界が更に曖昧になっていくが、それでも溢れ出る真摯さや真実味がそがこの作品の真骨頂だろう。カンヌ映画祭にて特別上映作品として上映された。



監督

ロウ・イエ

LOU YE

1965年、上海生まれ。上海大学美術学院にてアニメーションを学び、その後北京電影学院にて映画制作を学ぶ。94年、初の長編劇映画「レッド・エンド / 最後の恋人」を監督するも、中国国内では2年間の上映禁止となる。2 作目『ふたりの人魚』(00) はロッテルダム映画祭タイガー・アワード、また第 1 回東京フィルメックスで最優秀作品賞を受賞したが、同じく中国では上映禁止となる。現代中国映画における古典とみなされる同作は、2021 年に自身の監修の元でオリジナルの 16mm A-B ネガより 4K 復元された。続く『パープル・パタライ』(03)、『天安門恋人たち』(06)、『スプリング・フィーバー』(09) は全てカンヌ映画祭コンペティションに出品。パリを舞台にした『P/ri, ただよう花』(11) はヴェネチア映画祭にて上映された。『二重生活』(12) は再びカンヌ映画祭のある視点部門に出品。『ブラインド・マッサージュ』(14) はベルリン映画祭コンペティション部門で上映され銀熊賞 (芸術貢献賞) を受賞。『シャドウプレイ』(18) は台北台湾金馬奨で、『サタデー・フィクション』(19) はヴェネチア映画祭にて上映された。

監督◎ロウ・イエ 脚本◎ロウ・イエ、インリー・マー プロデューサー◎フィリップ・ボーバー、インリー・マー ラインプロデューサー◎シュー・ルー 撮影監督◎ゼン・ジエン 編集◎ティエン・ジャミン 衣装デザイン◎ヤン・ヤン キャスティングディレクター◎チャン・ロン プロダクションデザイン◎チョン・チェン ヘア&メイク◎ジャ・イェン サウンドデザイナー◎フー・カン リレコーディングミキサー◎フー・カン、タン・アイロン VFXスーパーバイザー◎ワン・レイ 製作会社◎Yingfilms Pte. Ltd. エッセンシャル・フィルムズ、ZDF/ARTE、Cinema Inutile、Teamfun International GmbH、ゴールドラッシュ・ピクチャーズ 出演◎チン・ハオ、マオ・ジャオルイ、チー・シー、ホアン・シュエン、リャン・ミン、チャン・ソンウエン、ヨウヨウ Director◎Lou Ye Writers◎Lou Ye, Yingli Ma Producers◎Philippe Bober, Yingli Ma Line Producer◎Xu Le Director of Photography◎Zeng Jian Editor◎Tian Jiaming Costume Design◎Yang Yang Casting Director◎Zhang Rong Production Design◎Zhong Cheng Hair & Make-Up◎Zhe Yan Re-Recording Mixer◎Fu Kang Re-Sound Designer◎Fu Kang Re-Sound Designer◎Fu Kang Tan Allong VFX Supervisor◎Wang Lei Production◎Yingfilms Pte. Ltd., Essential Films, ZDF/ARTE, Cinema Inutile, Teamfun International GmbH, Gold Rush Pictures Cast◎Qin Hao, Mao Xiaorui, Qi Xi, Huang Xuan, Liang Ming, Zhang Songwen, Youyou

スホ

Mexico, USA, France / 2024 / 125min



作品解説

麻薬取引の温床であるミチョアカン州の田舎で、シカリオ(殺し屋)の父のもとに生まれたスホは4歳で孤児になる。人里離れた丘の上に住む叔母ネメシアは、カルテルの掟によって命を狙われることになった幼いスホを匿い、彼女と姉妹的な関係にある友人ロザリアと、その2人の息子を伴って彼は育てられる。成長するにつれ、彼は親から引き継いだ血まみれの遺産について知ることになるが……。本作は暴力の連鎖の中で、一人の少年が忍耐強く自分の道を見つけようとするまでを描く成長物語。直接的な暴力は画面には殆ど映らないものの、私たち観客はそれが差し迫った避けられない前兆のように常に潜んでいるのを強く感じるだろう。リアリズムと抒情性を効果的に融合させながら、カルテルの暗躍を背景にした暴力と世代間のトラウマが巧みな脚本によって描かれている。アストリッド・ロンデロとフェルナンダ・ヴァラデスの映画作家デュオによる『息子の面影』(2020)に続く長編作品。前作に続き、本作もサンダンス映画祭で上映され、見事審査員特別賞を受賞した。



監督

アストリッド・ロンデロ&フェルナンダ・ヴァラデス

Astrid RONDERO & Fernanda VALADEZ

アストリッド・ロンデロとフェルナンダ・バラデスは、メキシコの脚本家、監督、プロデューサー。彼女たちは15年以上にわたる共同制作を通じ、長編映画2本『The Darkest Days of Us』(17)と『息子の面影』(20)、短編映画3本『Of This World』(10)、『In Still Waters』(11)、『400 Bags』(14)を制作してきた。『息子の面影』は、サンダンス映画祭、サン・セバスチャン国際映画祭、チュロリッヒ映画祭、テサロニキ映画祭で受賞し、ゴッサム賞の最優秀国際映画賞を受賞した。『スホ』は、彼女たちにとって3作目の長編映画となる。

メッセージ

私たちはアストリッド・ロンデロとフェルナンダ・バラデス、メキシコ出身の脚本家、監督、プロデューサーです。『スホ』は、私たちが監督として制作した2本目の長編映画であり、長編映画での3度目のコラボレーション作品です。私たちの映画の力強さは、少数派としての視点にあり、現代における物語を伝えるという強いコミットメントから生まれています。そして、現在のメキシコは、麻薬カルテルによる暴力で数千人の子供たちが孤児になっている時代です。彼らの中には、麻薬戦争の「付随的な被害者」としての犠牲者の子供たちもいれば、加害者として関与した人々の子供たちもいます。本作は、そうした「加害者側」の子供たちについて描いた物語です。私たちはこう問いかけました——「これらの子供たちは何を避け、何を待ち受けているのか？」そして、その問いがこの物語の形を作る出発点となりました。「若者が運命に立ち向かうためには、何が必要なのだろうか?」『スホ』は、名前と男性の2つの起源についての物語です。カルテルの殺し屋が、自分の息子に馬の名前を付けるという話を通じて、私たちは「超紐」について語っています。隠された遺産や、無意識のうちに引き継がれる夢——それは、私たち自身ではなく、両親やその前の世代が抱いていた夢です。それは、人間の経験がすべてつながっていることを示し、過去の世代の希望に対しても無関心ではない流れです。形式的に言えば、『スホ』はスホの人生において重要な存在だった多くのキャラクターたちを通して描かれる成長物語です。彼を愛し、教える過程で去っていった人々を描いたエピソード形式の映画です。これは、私たちが監督として最も興奮した点の一つでもあります。この映画の目標は、物語的にも形式的にも視覚的にも新たな探求を行うことです。『スホ』はエピソードごとに視覚的な物語が変わり、まるで各サブキャラクターがスホの人生の一つの季節を象徴しているかのように描かれています。各エピソードには、それぞれ異なる雰囲気を持たせることを目指し、テクスチャー、光、ムードの探求を行う中で、各エピソードを異なるレンズで撮影するという手法を取り入れました。この映画には、複数の現実が交錯しています。それは派手なスタイリッシュなものではなく、より古代的で原始的なものを目指しており、最初の人間たちから受け継がれてきた信仰やイメーに近しいものです。それは、火のように、星空の夜のように、そして死のように、神秘的でありながら現実的なものとして描かれています。エピソードはまるでプリズムの各面のように、一つひとつが複雑な全体像を形成するためのピースや層を加えていきます。最終的には、この映画全体が若者スホの肖像となり、彼が本来あるべき人物への約束を描いています。

脚本・監督◎アストリッド・ロンデロ、フェルナンダ・バラデス プロデューサー◎アストリッド・ロンデロ、フェルナンダ・バラデス、ティアナ・アルセガ 共同プロデューサー◎ジュエル・ロス、ヴァージニー・デウエサ、ジャン・パティスト、バイリー・メトリル エグゼクティブプロデューサー◎ガス・コーウィン 撮影監督◎シメナ・アマン 編集◎アストリッド・ロンデロ、フェルナンダ・バラデス、スーザン・コーダ 美術◎ベレン・エストラーダ 音響デザイン◎オマール・フアレス・エスピノ オリジナルサウンドトラック◎アストリッド・ロンデロ 出演◎ファン・ヘスス・バレラ、ヤディラ・ベレス・エステバン、サンドラ・ロレンザーノ、アレクシス・ハリエル・バレラ、ハイロ・エルナンデス・ラミレス、ケビン・ウリエル・アギラル・ルナ、カルラ・ガリード Script, Direction◎Astrid Rondero and Fernanda Valadez Producers◎Astrid Rondero, Fernanda Valadez, Diana Arenga Co-Producers◎Jewerl Ross, Virginie Devesa, Jean-Baptiste Bailly-Maitre Executive Producer◎Gus Corwin Cinematographer◎Ximena Amann Editors◎Astrid Rondero, Fernanda Valadez, Susan Korda Production Design◎Belén Estrada Sound Design◎Omar Juárez Espino Original Soundtrack◎Astrid Rondero Cast◎Juan Jesús Varela, Yadirra Perez Esteban, Sandra Lorenzano, Jassiel Varela, Jairo Hernández Ramirez, Kevin Uriel Aguilar Luna, Karla Garrido

Notes

In rural Michoacán, a hotspot for drug trafficking, Sujo was born to a hitman father but then orphaned at age four. His aunt, Nemesia, who lives in a remote hilltop home, takes him in after the rules of the cartel make him a target. He grows up among danger, with his friend Rosalia who has a sisterly bond with Nemesia, and Rosalia's two sons. As he matures, he begins to uncover the bloody legacy his father has bequeathed him. A coming-of-age story that portrays a boy's patient journey to find his own path amid cycles of violence. Although direct violence rarely appears on screen, the audience acutely senses its ever-present, looming threat. The film through its masterful script effectively blends realism and lyricism, depicting the violence and intergenerational trauma fueled by the cartel's activities. Like filmmaking duo Astrid Rondero and Fernanda Valadez's last feature "Identifying Features" (2020), this film was also screened at the Sundance Film Festival, where it won the Special Jury Award.

Directors' Biography

Astrid Rondero and Fernanda Valadez are Mexican writer-directors and producers. Through their collaboration for over 15 years, they have produced two feature lengths, "The Darkest Days of Us" (2017) and "Identifying Features" (2020) as well as three short films, "Of This World" (2010), "In Still Waters" (2011) and "400 Bags"(2014). "Identifying Features" received awards in Sundance, San Sebastian, Zurich, Thessaloniki and a Gotham Award for Best International Film. "Sujo" is their third feature film together.

Directors' Statement

We are Astrid Rondero and Fernanda Valadez and we are writers, directors, and producers from Mexico. Sujo is our second feature as directors and our third creative collaboration on a feature film. We believe the strength of our films comes from us being part of a minority and that we are committed to telling the stories of our time. And what a time it is in Mexico. Thousands of kids have become orphans due to the violence of the drug cartels. Some of them are children of the victims, "the collateral damage" of the drug war. But others are the sons and daughters of the people who actively participated as perpetrators. This is a story about these "others." We wondered - what is the inheritance of these kids, what awaits them? and then came the question that shaped this story - what would it take for a young man to challenge what appears to be his destiny?

Sujo became the tale of two origins: that of a name and that of a man. In the tale of a cartel gunman naming his son after a horse, we aim to talk about transcendence, about hidden inheritances, about the dreams we fulfill without us knowing: dreams in the minds of our mothers and fathers, and their mothers and fathers before them, a flow of human experience that connects us all and is not oblivious to the hopes of previous generations. Formally, Sujo is a coming-of-age story told through the many characters that meant something in Sujo's life: the people who loved him, taught him, and left behind as he grew up. It is an episodic film, and that's one of the aspects that excited us the most as directors: our goal in this film was to explore narratively, formally, and visually. Sujo has a visual narrative that changes as the episodes change as if every secondary character were a season in Sujo's life. We wanted each episode to have its atmosphere. And as we were exploring texture, light, and mood, we decided to shoot each episode with a different set of lenses that were key in that exploration.

The film has different levels of reality. Not in a flashy or stylized way, because we were looking for something more ancient and primal. Like beliefs and imagery that come from the first women and men, elements as magical as they are mysterious and real, like the fire, like a starry night, like death. So we want the episodes to be like the faces of a prism, each one adding a piece and a layer of a more complex object. In the end, the whole film is a portrait of this young man, Sujo. A portrait but also a promise of the man he deserves to be.

東京フィルメックス・特別招待作品

11.27 (Wed.) 12:50 / 12.1 (Sun.) 19:25

地獄に落ちた者たち

The Damned

Italy, Belgium, USA, Canada / 2024 / 89min



作品解説

1862年、北軍の志願兵部隊が北西部の辺境を偵察する任務を与えられる。彼らは、若者、年配者、神を恐れる者、神を恐れない者など、あらゆる階層の多様な集団だった。彼らの多くに共通しているのは、銃を撃った経験が殆どなく、ましてや人を殺したことなどないということだ。ただ、彼らが長い間本当に戦わなければならない敵は、屈辱であり、北西部の厳しい気候だった。彼らは神の存在に疑問を抱き、善と悪の概念について議論し、高まる幻滅感を理解しようとするが……。これまで20年以上に渡ってアメリカの見過ごされてきた辺境を描き続けてきたイタリア出身の映画監督ロベルト・ミネルヴィーニが、同国の南北戦争に目を向けた最新作。アメリカという国のアイデンティティを形作ってきた信仰、夢や希望、階級、そしてコミュニティといった要素が、これまでのミネルヴィーニの作品と同様に、この時代劇でも少し形を変えて探求されている。カンヌ映画祭のある視点部門で初上映され、同部門で監督賞を受賞した。



監督

ロベルト・ミネルヴィーニ

Roberto MINERVINI

ロベルト・ミネルヴィーニは、イタリア出身でアメリカを拠点に活動する映画監督である。彼は、演出と観客的要素を組み合わせたナラティブ・ドキュメンタリーの分野で世界的に著名なオールドールの一人と広く認識されている。2004年にニューヨーク市のニュースクールでメディア学の修士号を取得した後、アジアの大学でドキュメンタリー映画制作を教えていた。2007年にテキサスに移住し、そこで「The Passage」,「Low Tide」,「Stop the Pounding Heart」の3本の長編映画を監督した。これらの映画は「テキサス三部作」として知られ、アメリカ南部の農村地域を描いている。その後、ルジアナを舞台に「The Other Side」や「What You Gonna Do When the World's on Fire?」といった2本の長編映画を監督し、アメリカ社会の政治的領域に焦点を当て、社会的不正に言及している。近年では、彼のプロダクション会社 Pulpa Film を通じて、他の先鋭的な映画製作者の作品もプロデュースしており、例えば、ババル・カバディアの初のフィクション映画「All We Imagine as Light」やリサンドロ・アロンソの「Eureka」などを手がけていた。ロベルトの最新作「地獄に落ちた者たち」は、彼にとって初のフィクション映画である。

Notes

In 1862, a volunteer regiment from the Union is tasked with a reconnaissance mission in the northwest frontier of the United States. The diverse group includes young and old, the devout and the unbelieving. Most lack experience with firearms, forget about having ever killed anyone. However, the real enemies they face are endless monotony and the persistently harsh climate of the northwest. They grapple with doubts about God's existence, debate about good and evil, and try to understand their growing sense of disillusionment, and it almost feels as if battle will never come. Italian director Roberto Minervini, who has spent over twenty years depicting overlooked peripheries of America, chooses to focus on the Civil War in this film. Minervini's favorite themes of faith, dreams, hope, class, and community—elements that have shaped the identity of the United States—are explored in a slightly different manner in this period piece. The film premiered in the Un Certain Regard section of the Cannes Film Festival, where it won the Best Director award.

Director's Biography

Roberto Minervini is an Italian-born film director, who lives and works in the U.S. He is widely considered to be one of the world's most prominent auteurs of narrative documentaries, which combine dramatized and observational elements. After completing a Master of Arts in Media Studies at the New School in New York City in 2004, Roberto taught Documentary Filmmaking at the university level in Asia. In 2007, he moved to Texas, where he directed three feature films, "The Passage", "Low Tide" and "Stop the Pounding Heart", a Texas Trilogy that focused on rural communities in the American South. He then went on to direct two feature films set in Louisiana, "The Other Side" and "What You Gonna Do When the World's on Fire?", shifting to the political realm of American society and touching on social injustice. In more recent years, he has begun to produce the work of other visionary filmmakers through his production company Pulpa Film, including Payal Kapadia's first fiction film "All We Imagine as Light" and Lisandro Alonso's "Eureka". Roberto's latest film, "The Damned", is his first fiction film.

東京フィルメックス・特別招待作品

11.24 (Sun.) 16:10

ザ・ゲスイドウズ

The GESUIDOUZ

Japan / 2024 / 93min / 配給：ライツキューブ



©2024 「ザ・ゲスイドウズ」製作委員会

作品解説

26歳になったばかりのハナコは鳴かず飛ばずのバンド「ザ・ゲスイドウズ」でボーカルを務める。一向に売れる気配のない彼らの体たらくを見かねたマネージャーは、厄介払いを兼ねて、移住支援制度を活用して彼らを田舎へ強制移住させようとする。27歳で早逝したロック・レジェンド達に自らを重ねつつ、ハナコは27歳で死ぬこととグラストンベリー・フェスティバルへの出演を自らに誓い、何もない田舎で新しい曲を書こうとするが……。パンク音楽とホラー映画にオマージュを捧げる本作は、アキ・カウリスマキ監督の「レニングラード・カウボーイズ」シリーズを彷彿とさせる、とぼけた物語展開が魅力のファンタスティック・ロック・ムービー。だが、この作品が私たち観客の心を最終的に震わせるのだとすれば、それはジャンルを問わず、あらゆるポップ・カルチャーの持つある種の本質をこの作品が正確に突いているからだろう。大衆文化における「しょうもないもの」に人生を変えられた経験を持つ全ての人に観てもらいたい作品だ。トロント国際映画祭のミッドナイト・マッドネス部門でワールドプレミア上映された。



監督

宇賀那健一

UGANA Kenichi

1984年生まれ、東京都出身。ファンタジーでパンクッシュな作風がトロント国際映画祭、シッチェス映画祭、ブリュッセル国際ファンタスティック映画祭、ポルト国際映画祭、スラムダグズ映画祭、ファンタスティック映画祭、モントリオール・ニューヴォー・シネマ映画祭、トリノ映画祭など数々の国際映画祭で評判を呼ぶ。代表作は「悪魔がはらわていけにえで私」[異物 - 完全版 -]「転がるビー玉」等。最新作として初の国際共同製作のオール NY ロケのロマンスコメディが撮影済み、今冬に台湾と日本で撮影を行う国際共同製作のホラー映画が控える。

メッセージ

約15年前、初めての長編映画のお話をいただいたとき、その映画のために何年もの時間を費やしましたが^g（勿論偉の実力不足もあり）結局クランクインすることは出来ませんでした。僕は絶望しながらもけじめをつけるために、映画に全然関係ない企業に就職して営業の仕事をはじめました。それでもやっぱり映画が諦めきれなくて、毎日仕事を終えると定時に帰り撮れるかどうか分からない脚本と企画書を作り続ける日々を3年間過ごしていました。そんな時代があり、沢山の人たちの助けがあって今に至ります。今でも脚本を書くことは苦しいし、映画を撮ることは怖くて、一生慣れないんだろうなと思います。それと同時に世間からは下らないと馬鹿にされるようなジャンル映画に、僕は手を伸ばし続けるんだという覚悟を今は持っています。それはきっとこの数年間で共に戦う仲間を、そして僕の映画を愛してくれる人たちを見つけたからだと思っています。そんなことを思いながらこの映画を作りました。夢を持っている人、夢を叶えた人、夢を見失っている人、夢破れた人、全ての人にこの映画が優しく寄り添えますように。

監督●脚本●ロベルト・ミネルヴィーニ **撮影監督**●カルロス・アルフォンソ・コラル **編集**●マリー＝エレーヌ・ドゥゾ **サウンド**●ベルナット・ファルティアナ・チコ **サウンド編集**●イングリッド・シモン **リレコーディング**●ミキサー●トーマス・ゴダー **カスリ**●ナタリア・ラゴセオ **オリジナル音楽**●カルロス・アルフォンソ・コラル **ラインプロデューサー**●フランチェスカ・ヴィアトリア・ベネット、ヒリアナ・グロズダノヴァ **製作**●ババロ・ベントゥリ(オクタ・フィルム)、デニス・ピニン・リー & ロベルト・ミネルヴィーニ(プルパ・フィルム)、ババロ・デル・ブロンコ(ライ・シネマ) **エグゼクティブ・プロデューサー**●テレス・マンニノ、ジャン・アレクサンドリ、ルシアーニ・アネット、ファスホル **共同製作**●アリス・ルメール & セバスチャン・アンドレス(ミシガン・フィルムズ)、オクタ・フィルム & プルパ・フィルム、ライ・シネマと共に共同製作●ミシガン・フィルムズ、VOO O&E Be tv, シェルター・プロダクション **協力**●ストレゴニア、ムーンドッキング・フィルムズ **協力**●MIC - Direzione Generale Cinema e audiovisivo, フランス語共同制作フロンティア・ブリュッセル演形シネマセンター、フリル・グロウパネシア、ジュリア州開発基金、Taxshelter.BeおよびING, ベルギー連邦政府の税制優遇制度、トリア・ド・エモン州映画委員会、カナダの芸術振興基金プログラム(Cavco)、サブエグ州の特別振興プログラム(Sodec) **協力**●Kaibou Production(カナダ) **国際セール**●Les Films Du Losange **出演**●ジュレミア・ヌーブ、レネ・W・ロビン、カイヤ・メルズジャー、アナ・カールソン、ジューダ・カールソン、テム・カールソン、ビル・ゲートン **Directed by**●Roberto Minervini **Written by**●Roberto Minervini **Director of Photography**●Carlos Alfonso Corral **Editing**●Marie-Hélène Dozo **Sound**●Bernat Foriana Chico **Sound Editing**●Ingrid Simon **Re-Recording Mixer**●Thomas Gauder **Colorist**●Natalia Raguseo **Original Score**●Carlos Alfonso Corral **Line Producers**●Franческа Vittoria Bennett & Biliana Grozdanova **Produced by**●Paolo Benzi (Okta Film), Denise Ping Lee & Roberto Minervini (Pulpa Film), Paolo Del Brocco for Rai Cinema **Executive Producers**● Teresa Mannino, Jean-Alexandre Luciani, Annette Fauboll **Co-produced by**●Alice Lemaire & Sébastien Andres (Michigan Films) **A production**●Okta Film and Pulpa Film with Rai Cinema **In Co-Production with**●Michigan Films, VOO O&E Be tv, Shelter Prod **In Association with**●Stregonia, Moonduckling Films **with the Support of**●MIC - Direzione Generale Cinema e audiovisivo, Centre du cinéma et de l'audiovisuel de la Fédération Wallonie-Bruxelles, Fondo Audiovisivo Friuli Venezia-Giulia, Taxshelter.Be and ING, Tax shelter du Gouvernement federal de Belgique, Film Commission Torino Piemonte, Federal tax credit program of Canada (Cavco), Provincial tax credit program of Quebec (Sodec) **Cast**●Jeremiah Knupp, René W. Solomon, Cuyler Ballenger, Noah Carlson, Judah Carlson, Tim Carlson, Bill Gehring **In Collaboration with**●Kaibou Production (Canada) **International Sales & French Distribution**●Les Films Du Losange

監督●脚本●宇賀那 健一 **音楽**●今村 裕史 **楽曲プロデュース**●KYONO **エグゼクティブプロデューサー**●鈴木 祐介 **プロデューサー**●角田 陸 **ラインプロデューサー**●工藤 渉 **撮影**●古屋 幸一 **照明**●加藤 大輝 **録音**●岩崎 政志 **美術**●松塚 隆史 **スタイリスト**●中村 もやし **ヘアメイク**●くつみ 綾音 **特殊メイク**●特殊造型●千葉 実生、遠藤 斗貴彦 **助監督**●可見 正光 **編集**●小奥野 昌史 **VFX**●松野 友喜人 **聲音**●効果●MA●鈴木 紀貴 **カラーグレーディング**●山田 祐太(レスパシジョン) **制作主任**●白鳥 飛翔 **スチール**●柴崎 まどか **キャストイング**●渡辺 有美 **配給**●ライツキューブ **出演**●夏子、今村裕史、喜矢武 豊、Rocko Zevenbergen、遠藤雄弥

Director and Screenplay●Ujana Kenichi **Music**●Imamura Leo **Music Producer**●Kyono **Executive Producer**●Suzuki Yusuke **Producer**●Sumida Riku **Line Producer**●Kudo Wataru **Cinematographer**●Furuya Koichi **Lighting Director**●Kato Daiki **Sound Operator**●Iwasaki Kanshi **Production Designer**●Matsuzaka Takashi **Wardrobe Master**●Nakamura Moyashi **Hair & Make-up Artist**●Kutsumi Noriyo **Special Makeup**●Special Effects●Chiba Mio, Endo Tokihiko **Assistant Director**●Kani Masamitsu **Editor**●Kominno Masashi **VFX Supervisor**●Matsuo Yukito **Mixer**●Suzuki Noritaka **Color Grading**●Yamada Yuta(L'EspacéVision) **Production Manager**●Shiratori Asuka **Still Photographer**●Shibasaki Madoka **Casting Director**●Watanabe Yumi **Cast**●Natsuko, Imamura Leo, Kyan Yutaka, Rocko Zevenbergen, Endo Yuya **Distributed by**●Rights Cube

TOKYO FILMeX 2024 Made in Japan

会場：丸の内TOEI、ヒューマントラストシネマ有楽町

Venue: Marunouchi TOEI, HUMAN TRUST CINEMA Yurakucho

世界に向けて日本映画の多様な新作を4作品、ご紹介します。

Four latest and varied works of Japanese cinema will be introduced to the world.



P29 ● ユリシーズ / 宇和川輝

Ulysses Japan, Spain / Director: UWAGAWA Hikaru

P30 ● 雪解けのあと(仮) / ルオ・イーシャン

After the Snowmelt Taiwan, Japan / Director: LO Yi-Shan

P31 ● 椰子の高さ / ドゥ・ジエ

The Height of the Coconut Trees Japan / Director: Du Jie

P32 ● DIAMONDS IN THE SAND / ジャヌス・ヴィクトリア

DIAMONDS IN THE SAND Japan, Malaysia, Philippines / Director: Janus VICTORIA

11.23 (Sat.) 16:10

ユリシーズ

Ulysses

Japan, Spain / 2024 / 73min



© ikoi films

作品解説

この映画は3部に分かれている。第1部では、マドリッドで8歳の息子と2人きりで暮らすロシア人の母親に私たちは出会う。続く第2部では、一人の日本人男性がバスク人の若い女性と知り合う。2人は共に時間を過ごし、彼女は彼を友人たちに紹介する。そして第3部では、舞台は日本に移され、若い男性がお盆の時期に実家に帰省し、亡くなった祖父の霊を迎えるための準備を祖母と共に進めていく…。本作は、そのタイトルが示す通り、ジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』の形式的なアイデアを取り入れた作品で、更には『ユリシーズ』が大きく依拠しているホメロスの『オデュッセイア』を大まかに翻案したものだという。ただ、無論ここではギリシャの英雄の困難な帰郷の旅がそのまま語られているわけではない。むしろここでは「家」や「帰属」といった概念を巡って各々の物語が展開されており、世界の様々な場所での日常生活の断片が曖昧さを残したまま控えめな筆致で描かれている。本作はマルセイユ国際映画祭で初上映され、続いてサン・セバスチャン映画祭でも上映された。



監督 宇和川輝

UWAGAWA Hikaru

スペイン、サンセバスチャンの Elias Querejeta Zine Eskola で フィルムメイキング・コースの修士課程を修了。2023年、サンセバスチャン国際映画祭映画作家助成レジデンスプログラム Ikusmira Berriak に選出される。その後、初長編映画『ユリシーズ』がマルセイユ国際映画祭、サンセバスチャン国際映画祭に正式出品される。現在は東京を拠点に映画制作をしている。

メッセージ

この映画はホメロスの神話『オデュッセイア』の構造を用いて、自分が出会った人々、体感した時間、その場にいる空間を映画作品として記録していく、ある種の個人史を作るという試みでした。73分という短い映画ですが、この中には自分が生きてきた数年間の時間が記録されています。自分の個人史はまだ続いています。一つのサイクルの締めくくりに、この映画が誕生したこと、そしてそれを観客の皆さんと共有できる機会をいただけているのが、とても幸せなことだと実感しています。それもまた、この映画に関わってくれた大切な仲間たちのおかげです。

監督 ● 宇和川輝 プロデューサー ● 宇和川輝、関野佳介 撮影 ● 宇和川輝、Avery Duncan、関野佳介 録音 ● Nicolás Auger, Joan Pàmies Lluís, 吉川諒 セノグラファー ● 板倉勇人 スチール ● キー 整音 ● 黄永昌 カラーグレーディング ● 永井愛華 日本語字幕 ● 新谷和輝 英語字幕 ● D B Andreous 制作プロダクション ● ikoi films アソシエイトプロダクション ● Elias Querejeta Zine Eskola 企画助成 ● Ikusmira Berriak © ikoi films
Director ● Uwagawa Hikaru Producer ● Uwagawa Hikaru, Sekino Keisuke Cinematographer ● Uwagawa Hikaru, Avery Duncan, Sekino Keisuke Recording ● Nicolás Auger, Joan Pàmies Lluís, Yoshikawa Ryo Scenographer ● Itakura Yuto Still Photographer ● Kii Sound Mixer ● Hwang Young Chang Color Grading ● Nagai Manaka Japanese subtitle ● Niiya Kazuki English subtitle ● DBAndreous Production Company ● ikoi films Associate Production ● Elias Querejeta Zine Eskola Planning Support ● Ikusmira Berriak
Cast ● Alevtina Tikhonova, Dimitri Tikhonov, Enaitz Zulaika, Ishii Izumi, Hara Kazuko, Uwagawa Hikaru

DIAMONDS IN THE SAND

Japan, Malaysia, Philippines / 2024 / 102min



作品解説

離婚して東京で一人暮らしをしているサラリーマンの陽志。彼のことを心配してくれる母親もついに他界してしまう。意味のある人間関係は殆ど残っていないため、生きる意味がないという現実には直面する。娘を養うために日本で介護士として働くミネルバとの偶然の出会い、陽志に自分の状況を新たな視点で見るように促す。そんな中、名前も知らない隣人の老人の腐乱死体が発見され、その死は孤独死と判定される。同じ運命を辿りたくない陽志は、従来の用心深さを捨て、ミネルバを追ってフィリピンの首都マニラに向かうが……。孤独死という日本の現象を探究することから始まった本作は、2013年のタレンツ・トーキョー(当時はタレント・キャンパス・トーキョー)の受賞企画であり、監督兼脚本家のジャヌス・ヴィクトリアにとっては初の長編作品となる。どんな作品でも必ず光る演技を見せるリリー・フランキーがここでも抜群の存在感を發揮しており、ベテラン撮影監督の芦澤明子による、日本とフィリピンの空気感をそれぞれに映し出す映像も魅力的である。



監督

ジャヌス・ヴィクトリア

Janus VICTORIA

フィリピンのマニラを拠点とする脚本家・監督。フィリピンの放送局やデジタルプラットフォーム向けに時事問題のドキュメンタリーを制作しながら、人々や場所の関係を探究している。これまでに『マニラの神話』を含む6本の短編映画や、東京のアパートでの孤独死に関するドキュメンタリー短編『沈黙との出会い』を制作。『DIAMONDS IN THE SAND』は長編映画としての監督デビュー作となる。

メッセージ

人生の重さはどのように測ることができるのでしょうか?もし私たちが孤独死、つまり、数週間や数ヶ月後によく発見されるような死を迎えた場合、それは私たちに何を持って語っているのでしょうか?この映画は、私が自分の人生と故郷であるマニラを見つめるために、ある意味ではその対極にある場所を通して向き合おうとしたものです。最終的に、孤独死とはただ一人で死ぬことではなく、忘れ去られることだと気づきました。そして、どれだけ良い人生を送ったかという真の尺度は、私たちが去ったときにどれだけ多くの人に惜しまれるかにあるのだと悟ったのです。

脚本・監督 ● ジャヌス・ヴィクトリア **製作** ● ローナ・ティエ、ダン・ヴィレガス、菅我満寿美 **エグゼクティブ・プロデューサー** ● マリア・ソフィア・アイデ・マルド、ジョセイト・アタイデ、ジム・G・バルタザール **エグゼクティブ・プロデューサー** ● ダン・ヴィレガス、アントネット・ハダダネ、ローナ・ティエ、ホー・ユハン、菅我 満寿美 **エグゼクティブ・プロデューサー** ● マネット・A・デシリット、市山 尚三、ジャヌス・ヴィクトリア **共同プロデューサー** ● 朝田 家、西前俊典、小林智浩 **スーパーバイジング・プロデューサー** ● キャット・カタラン **ライティング・プロデューサー** ● プロジェクト8、呉村 芳建、大西 望 **撮影監督** ● 芦澤明子 **照明監督** ● 榎木亮則 **プロダクション・デザイナー** ● ロー・イヴ・フランシスコ **セット・デザイナー** ● 片平圭衣子 **編集** ● スー・ムン・タイ **サウンドデザイナー** ● コリーヌ・ド・サンボセ **作曲家** ● ジャイ・サルダジェノ **出演** ● リリー・フランキー、吉行和子、マリア・イザベル・ロペス、ソリアン・クルス、チャリー・デバソ **Written And Directed by** ● Janus Victoria **Produced by** ● Lorna Tee, Dan Villegas, Soga Masumi **Executive Producers** ● Maria Sophia Atayde-Marudo, Josselte Atayde, Jim G. Baltazar **Executive Producers** ● Dan Villegas, Antoinette Jadaone, Lorna Tee, Ho Yuhang, Soga Masumi **Executive Producers** ● Manet A. Dayrit, Ichiyama Shozo, Janus Victoria **Co-Producer** ● Shimada Tsuyoshi, Nishimae Toshihiko, Kobayashi Tomohiro **Supervising Producer** ● Catsi Catalan **Line Producers** ● Project 8 Projects, Kuremura Yoshi, Onishi Nozomu **Director of Photography** ● Ashizawa Akiko **Production Designer** ● Eero Yves S. Francisco **Set Designer** ● Katarina Keiko **Lighting Director** ● Miki Shigenori **Editor** ● Soo Mun Thyne **Sound Designer** ● Corinne De San Jose **Music Composer** ● Jai Saldajeno **Cast** ● Lily Franky, Maria Isabel Lopez, Soliman Cruz, Yoshiyuki Kazuko and Charlie Dizon

第25回東京フィルメックス 関連事業 Talents Tokyo 2024

東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、及びタレンツ・トーキョー実行委員会の主催、並びにベルリナーレ・タレンツ(ベルリン国際映画祭)との提携、ゲーテ・インスティテュート東京の協力のもと、映像人材育成プロジェクト「Talents Tokyo 2024」を11月25日-12月1日に実施します。

本プロジェクトは、映画分野における東京からの文化の創造・発信を強化するため、「次世代の巨匠」になる可能性を秘めた「才能(=talent,タレント)」を育成することを目的に、映画作家やプロデューサーを目指すアジアの若者を東京に集めて実施します。現在世界で活躍するプロフェッショナルをエキスパート(Expert)として迎え、レクチャーや企画合評会を通じて第一線の人材の視線に晒されることで、強烈なインスパイアを受ける体験を促します。また、タレント同士やエキスパートとタレント、さらには映画祭「東京フィルメックス」に集まる映画作家たちとの交流により、国際的なネットワークを新たに築くことも目指します。

From November 25 - December 1, 2024, the talent development and networking platform "Talents Tokyo 2024" will be conducted under the supervision of the Tokyo Metropolitan Government, Arts Council Tokyo, and Talents Tokyo Organizing Committee in cooperation with Berlinale Talents, and in collaboration with Goethe-Institut Tokyo.

Talents Tokyo 2024 brings together 17 upcoming promising filmmakers and producers. Film experts at the forefront of cinema including Anocha SUWICHAKORNPOONG (Director), Alemberg ANG (Producer), Isabelle GLACHANT (World Sales), and Nikola JOETZE (Project Manager of Berlinale Talents) will share their experiences through lectures.

Under this year's theme "To Love is To See", each participant will have the opportunity to present their own project. Four experts will analyze each project from various aspects, such as directing, producing, and investment viability.

This initiative aims to inspire promising filmmakers to develop their voices and become the "Next Masters".

メイン講師 Main Experts

- アノーチャ・スウィチャーゴーンボン (監督) Anocha SUWICHAKORNPOONG (Director)
- アレンバーグ・アン (プロデューサー) Alemberg ANG (Producer)
- イザベル・グラシャン (ワールド・セールス) Isabelle GLACHANT (World Sales)
- ニコラ・ヨーツェ (ベルリナーレ・タレンツ、プログラム・マネージャー) Nikola JOETZE (Project Manager of Berlinale Talents)

参加者 Talents

監督 Directors : Danech SAN (CAMBODIA) / YAN Haohao (CHINA) / YANG Yanxi (CHINA) / François CHANG (FRANCE, CHINA) / CHAN Tze-woon (HONG KONG) / Adriano Rudiman (INDONESIA) / HATAKEYAMA Kana (JAPAN) / MURAKAMI Riko (JAPAN) / JANG Jeehye Kay (KOREA) / LAU Kok Rui (MALAYSIA) / Lkhagvadulam PUREV-OCHIR (MONGOLIA) / Alvin LEE (SINGAPORE) / MAI Huyhên Chi (VIETNAM)

プロデューサー Producers : Annie SONG (CHINA) / B.M. Anggana (INDONESIA) / KOIDE Daiju (JAPAN) / SHEN Ivy Yu-Hua (TAIWAN)

タレンツ・トーキョー開催概要

- 名称: Talents Tokyo 2024 / タレンツ・トーキョー 2024 ● 期日: 令和6(2024)年11月25日(月)~12月1日(日)
- 場所: 有楽町朝日スクエアほか
- ホームページ: <https://talents-tokyo.jp/>
- 主催: 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、タレンツ・トーキョー実行委員会
- 提携: ベルリン国際映画祭(ベルリナーレ・タレンツ)
- 協力: ゲーテ・インスティテュート

Outline of Talents Tokyo 2024

Title: Talents Tokyo 2024 Dates: From Monday, November 25, to Sunday, December 1, 2024 Venue: Yurakucho Asahi Square, etc. Organizers: Tokyo Metropolitan Government / Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture) / Talents Tokyo Organizing Committee / In Cooperation with: Berlinale Talents / In Collaboration with: Goethe-Institut Tokyo Official home page: <https://talents-tokyo.jp/>

「ネクスト・マスターズ・サポート・プログラム」受賞者及び選抜企画

2014年に開始した、修了生対象のプログラム「ネクスト・マスターズ・サポート・プログラム」では、タレンツ・トーキョー修了生を対象に、a) 企画開発ファンド: 製作前の企画を実現するための支援(上限100万円)、b) プロモーションファンド: 完成間近の作品を後押しするための支援(上限50万円)、c) フェローシップ・プログラム: 国際マーケット参加の渡航費(上限20万円)の3種類の資金援助を実施します。In 2014, Talents Tokyo launched a new initiative to support the alumni, providing grants from (a) Project Development Fund and (b) International Promotion Fund. Talents Tokyo awards a Project Development Fund grant of up to 1 million JPY or an International Promotion Fund grant of up to 500,000 JPY to the selected projects.

a) 企画開発ファンド Project Development Fund:

LI Yang (TT2016、中国) <GHOST OF UENO> / OATES Yinchao (TT2023、中国) <Water Has Another Dream> / Yuan YUAN (TT2023、中国) <Heading South> / Zi GAO (TT2018、中国) <Raja's Early Summer> / Yulia Evina Bhara (TT2020、インドネシア) <WATCH IT BURN> / NAKANISHI Mai (TT2023、日本) <Child, Uninvited> / Sein Lyan Tun (TT2016、ミャンマー) <The Bamboo Family> / Angelina Marilyn BOK (TT2023、シンガポール) <Free Admission> / Siyou TAN (TT2022、シンガポール) <amoeba> / Nelson YEO (TT2014、シンガポール) <The Drought> / KUO Ming-Jung (TT2022、台湾) <A Woman Builds> / NGUYEN Hoang Diep (TT2023、ベトナム) <The saddest stories on Earth>

b) インターナショナル・プロモーション・ファンド International Promotion Fund:

Alemberg ANG (TT2014、フィリピン) <Some Nights I Feel Like Walking> / Janus VICTORIA (TT2013、フィリピン) <Diamonds in the Sand> / CHIANG Wei Liang (TT2019、シンガポール) <Mongrel>

Talents Tokyo 2024 Open Campus

日時：令和6(2024)年11月28日(木) 会場：有楽町朝日ホール スクエアB

ホームページ：http://talents-tokyo.jp/ ※事前申込制、公式サイトより、11月27日までに登録してください。

【スケジュール】

13:00-14:00 Open Campus：内容「15 Years of Talents! Making Dream Projects Come True!

登壇：アノーチャ・スウィチャーゴーンポン (Anocha SUWICHAKORNpong) 氏 (タイ・映画監督)

ジャヌス・ヴィクトリア (Janus VICTORIA) 氏 (フィリピン・映画監督)

チャン・ウェイリャン (CHIANG Wei Liang) 氏 (シンガポール・映画監督)

司会：市山尚三

14:30-17:40 Open Presentation 内容：Talents Tokyo 2024 参加者 17名による企画発表

Talents Tokyo 2024 Open Campus Date: November 28th, 2024

Talk Event: “15 Years of Talents! Making Dream Projects Come True”

by Anocha SUWICHAKORNpong (Thailand, Film Director),

Janus VICTORIA (Philippines, Film Director) and CHIANG Wei Liang (Singapore, Film Director).

Moderated by ICHIYAMA Shozo

Time: Thursday, November 28th 13:00 - 14:00 / Venue: Yurakucho Asahi Hall Square B

This session is open to the public

Open Presentation to Film Professionals

Content: 17 participating talents present their projects to industry professionals and press members.

Time: hursday, November 28rd 14:30 - 17:40 / Venue: Yurakucho Asahi Hall Square B

This session is open to press and film professionals

Talents Tokyo HP (https://talents-tokyo.jp)

Registration deadline: Wednesday, November 27th (registration will be open on Nov. 20)

□サイドイベント Side Events□

■トークイベント：国際共同制作の今

今年の東京フィルメックスは25年間の歴史で初めてコンペティション部門とメイド・イン・ジャパン部門の全上映作を複数の国・地域が参加する国際共同製作作品が占めることになりました。トークショーでは上映作品の監督が、自身の映画製作のリアルな経験を元に、国境や文化を超えた共同製作の意義や課題を率直に語り合います。

ヨーロッパでは欧州統合を背景に1990年代から多国籍の映画製作が定着していますが、アジアでも2000年代以降に勢いが加速し、現在は様々な形でグローバルな映画作りが実現しています。本国だけでは製作費を集めるのが難しい野心的な企画でも複数国から資金協力を得ることでリスクが分散され、より広い市場につながるができるのが国際共同製作のメリット。多様な視点が加わることでクリエイティブ面での相乗効果も期待されます。日本でも「一見すると邦画だが実は国際共同製作」という新作映画が徐々に増えています。今年8月には日伊映画共同製作協定が発効するなど、海外との協業の土台作りも進んでいます。

トークショーでは、アジアの若手監督たちが「なぜ国際共同製作を選んだのか」「文化的背景の異なるチームが映画作りにどのような影響を与えたか」など、ボーダレスな映画製作の実情を具体的に掘り下げます。アジアと日本の映画の未来を展望する場として、ぜひご注目下さい。

日時：11月26日(火) / 19:30-20:40(開場 19:20) 会場：有楽町朝日スクエアB 参加方法：無料／HPより事前申込下さい。

【登壇予定ゲスト】

スキャンダル・コプティ(Scandar COPTI)／コンペティション部門『ハッピーホリデーズ』監督

チウ・ヤン(QIU Yang)／コンペティション部門『空室の女』監督

ジャヌス・ヴィクトリア (Janus VICTORIA)／Made in Japan部門『DIAMONDS IN THE SAND』監督

コウヤ・カムラ (Koya KAMURA)／コンペティション部門『ソクチョの冬』監督

ファシリテーター：深田晃司(映画監督)

■特別対談：ロウ・イエ & 山中瑤子

「第25回東京フィルメックス」で審査員を務める中国のロウ・イエ監督と、カンヌ国際映画国際批評家連盟賞作「ナミビアの砂漠」が大ヒット中の山中瑤子監督の特別トークイベントを【11月28日19時30分から】開催します。手持ちカメラによる独特の映像美で激動する中国の人間ドラマを鋭く描いてきたロウ監督は、山中監督が最も敬愛するフィルムメーカーのひとり。独特の映像美学や鋭い社会的視点で中国映画の新たな地平を切り拓いてきたロウ監督と、斬新な人物描写で日本映画界に新風を吹き込んだ山中監督が初めて共に語り合う貴重な機会となります。それぞれの映画術や創作の深層に迫り、映画のこれからを探る2人の対話は必見！どうぞご参加下さい。

日時：11月28日(木) / 19:30-20:40(開場 19:20) 会場：有楽町朝日スクエアB 参加方法：一般 1,000円／LivePocketより購入

【登壇予定ゲスト】

ロウ・イエ (LOU Ye／中国／映画監督)

プロフィールは審査員ページ(P4)をご確認ください

山中瑤子 (YAMANAKA Yoko／日本／映画監督)

1997年生まれ、長野県出身。独学で制作した初監督作品「あみこ」が PFF アワード 2017 で観客賞を受賞。翌年、20歳で第68回ベルリン国際映画祭に史上最年少で招待されたほか、香港、NYをはじめ10カ国以上で上映され、話題を呼んだ。本格的長編第一作となる「ナミビアの砂漠」(24)は第77回カンヌ国際映画祭 監督週間に出品され、女性監督として史上最年少となる国際映画批評家連盟賞を受賞した。監督作に山戸結希プロデュースによるオムニバス映画「21世紀の女の子」(18)の「回転でん子とどりーむちゃん」、オリジナル脚本・監督を務めたテレビドラマ「おやすみ、また向こう岸で」(19)、ndjcプログラムの「魚座どうし」(20)など。

□サイドイベント Side Events□

■マスタークラス：ウェイン・ワン

昨年、第24回東京フィルメックスでクロージング作品としても「命は安く、トイレットペーパーは高い」を上映し、Q&Aにも登壇いただいたウェイン・ワン監督によるマスタークラスを開催。貴重なこの機会にぜひ、映画制作の極意をお聞きください。また、フィルメックスでは育成事業：タレンツ・トーキョー内でマスタークラスは非公開形式で実施されていますが、今回はオープンな形式での実施。タレンツ・トーキョー参加者にも大好評のウェイン・ワンの講義をお楽しみに。

日時：12月1日(日) / 16:15-17:45(開場 16:00) 会場：有楽町朝日スクエアB 参加方法：一般 1,000円／LivePocketより購入

【登壇予定ゲスト】

ウェイン・ワン (Wayne WANG／アメリカ／映画監督)

父親が大好きだった映画スター：ジョン・ウェインにちなんで名付けられ、香港で生まれ育つ。17歳の時、両親が医学校への進学を期待してアメリカへの移住を手配したが、芸術に傾倒し、オークランドのカリフォルニア美術大学で映画とテレビについて学ぶ。1980年代初頭に「Chang is Missing」(82)、「Dim Sum: A Little Bit of Heat」(85)、「夜明けのローポート」(89)といった監督作で革新的な監督としての評価を確立。メジャー系で制作した「ジョイ・ラック・クラブ」(93)や「メイド・イン・マンハッタン」(02)、インディペンデント系でも「スモーク」(95)や「地上より何処かで」(99)といった作品で知られている。2007年には「千年の祈り」がサンセバスチャン映画祭最高賞のゴールデンシェル賞を受賞、2016年にはサンディエゴ・アジア映画祭で生涯功労賞を受賞している。現在、サンフランシスコとニューヨークを拠点としている。

モデレーター：市山尚三(東京国際映画祭プログラミング・ディレクター)

NPO法人独立映画鍋 × 第25回東京フィルメックス共催

■「世界に挑め！企画プレゼンカの磨き方」

作りたい映画の企画を思いついたとき、それをどのようにまとめ、プレゼンすればよいのでしょうか。海外を視野にに入れて企画を売り込む国際映画祭の「企画マーケット」や「ピッチング」という言葉はなんとなく知っているけど、実際それらはどこで何のために行われていて、そこにたどり着くにはどのような手順を踏めばよいのかはあまり知られていないかもしれません。今回の講座では、タレンツトーキョーなどの育成プログラムへの参加方法や申請書の書き方など初歩的なところから、効果的に自分の映画をプレゼンするための秘訣まで探っていきます。海外のマーケットやピッチングの経験者である映画作家・プロデューサーや育成プログラムの審査員とともに、海外を見据えた企画プレゼンカを磨いていきましょう。

日時：12月1日(日) / 13:00-15:00(開場 12:30) 会場：有楽町朝日スクエアB

参加方法：一般 1,000円 / 映画鍋会員 500円 (事前予約不要、当日直接会場までお越しください)

【登壇予定ゲスト】

池田高明 (株式会社NHKエンタープライズ シニア・マネージャー)

映画チャンネル編成プロデューサー等を経て、2007年株式会社国際メディア・コーポレーション(現NHKエンタープライズ)入社。以来、映画やTV番組の買付け、ライセンス業務に携わる。現在、経営企画室法務・審査部勤務。人材育成分野では、映画上映専門家養成講座、映画美学校映像翻訳講座特別講義、大学の映像ビジネス論講座等の講師を歴任。2011年よりタレンツ・トーキョー選考委員。ロンドン・シティ大学院文化政策・マネジメント学部修士課程卒業(セゾン文化財団助成事業)。文化経済学会会員。

太田信吾 (映画監督・俳優)

処女作の映画「卒業」がイメージフォーラムフェスティバル2010優秀賞・観客賞受賞。初の長編映画「わたしたちに許された特別な時間の終わり」が山形国際ドキュメンタリー映画祭2013 で公開後、世界12カ国で公開。近作に映画「解放区」など。映画「現代版 城崎にて」でゆうばり国際ファンタスティック映画祭2022優秀芸術賞受賞。制作中の長編ドキュメンタリー「沼影市民プール」は、カルロヴィ・ヴアリ国際映画祭2024にて日本企画としては初となる「First Cut+ Works in Progress Award」を受賞

竹中香子 (プロデューサー・俳優・演劇教育)

2011年に渡仏し、日本人としてはじめてフランスの国立高等演劇学校の俳優セクションに合格し、2016年、フランス俳優国家資格を取得。2021年、太田信吾との共同企画、映画「現代版 城崎にて」では、プロデュース、脚本、主演を担当し、ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2022にて優秀芸術賞を受賞。2021年より、太田信吾映像作品のすべてのプロデュースを担当。現在、太田信吾最新作「沼影市民プール」で初の長編プロデュースに挑む。

渡邊一孝 (プロデューサー)

配給会社、俳優事務所、映画祭のスタッフを経て、日英字幕制作、自主映画の制作を行う。2014年に映画の企画から配給・セールス及び日英翻訳/字幕制作を行う株式会社E.x.N(エクスン)を設立。日本のローカル性を持った映画や、アジア諸国との共同製作映画をプロデュースする。山形国際ドキュメンタリー映画祭「ヤマガタ・ラフカット」部門プログラムコーディネーター。プロデュース作として、「海辺の彼女たち」など。

司会：新谷和輝(映画研究者／独立映画鍋共同代表)

【お問い合わせ】NPO法人独立映画鍋(070-5664-8490) / info@eiganabe.net

第25回東京フィルメックス スタッフ・協力者一覧

第25回東京フィルメックス実行委員会 / TOKYO FILMeX 2024 Organizing Committee

●特定非営利活動法人東京フィルメックス / TOKYO FILMeX (Nonprofit Organization)

市山尚三 / 理事長	ICHIYAMA Shozo, Chairperson
黒沢 清 / 理事	KUROSAWA Kiyoshi
諏訪敦彦 / 理事	SUWA Nobuhiro
山内真理 / 理事	YAMAUCHI Mari
國賓瑞恵 / 理事	KUNIZANE Mizue
深津純子 / 理事	FUKATSU Junko
篠崎 誠 / 理事	SHINOZAKI Makoto
渡辺真起子 / 理事	WATANABE Makiko
木村正彦 / 理事	KIMURA Masahiko
田中誠一 / 理事	TANAKA Seiichi
中川直政 / 監事	NAKAGAWA Naomasa
北村二郎 / 監事	KITAMURA Jiro

●共催 / Co-presented by:

朝日新聞社	Asahi Shimbun Company
-------	-----------------------

矢野優子 (朝日新聞社メディア事業本部アカウントソリューション1部長)	YANO Yuko (The Asahi Shimbun Company)
多留岳人 (朝日新聞社メディア事業本部アカウントソリューション1部次長)	TARU Takehito (The Asahi Shimbun Company)
松浦敬 (朝日新聞社メディア事業本部アカウントソリューション1部アカウント担当次長)	MATSUURA Takashi (The Asahi Shimbun Company)

●助成 / Supported by :

文化庁文化芸術振興費補助金 (映画祭支援事業)
 公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】
 在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ

●特別協賛 / Special Sponsors:

シネマイニュティル	Cinema Inutile
-----------	----------------

●協賛 / Sponsors:

デジタメ	digitame
シマフィルム	Shima Film
コネクション	Connection
	KODAK

●協力 / In collaboration with

アテネ・フランセ文化センター	Athénée Français Cultural Center
東映	TOEI
東京テアトル	Tokyo Theatre
東京学生映画祭	Tokyo Student Film Festival
Festival Scope Pro	Festival Scope Pro

(提携企画 Talents Tokyo 2024)

●主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
 タレンツ・トーキョー実行委員会

●提携：ベルリン国際映画祭 (ベルリナーレ・タレンツ)

●協力：ゲーテ・インスティトゥート東京

"

●協力 / Special Thanks to:

相原裕美	AIHARA Hiromi
秋山京子	AKIYAMA Kyoko
アレックス・ロー	Alex LO
安藤裕康	ANDO Hiroyasu
藤岡朝子	FUJIOKA Asako
ショーレ・ゴルパリアン	Shohreh GOLPARIAN
樋口裕子	HIGUCHI Yuko
堀三郎	HORI Saburo
池田高明	IKEDA Takaaki
井上幸治	INOUE Koji
ジャ・ジャングー	JIA Zhang-ke
金敬淑	KIM Kyung Sook
木村郁子	KIMURA Ikuko
小林一毅	IKKI KOBAYASHI
ウルリケ・クラウトハイム	Ulrike KRAUTHEIM
久保添倫成	KUBOZOE Norishige
久保田ゆり	KUBOTA Yuri
松本正道	MATSUMOTO Masamichi
松下由美	MATSUSHITA Yumi
三好剛平	MIYOSHI Gohei
宮本則昭	MIYAMOTO Noriaki
中平一史	NAKADAIRA Kazushi
中平三紀	NAKADAIRA Miki
根本理恵	NEMOTO Rie
西嶋憲生	NISHIJIMA Norio
西澤彰弘	NISHIZAWA Akihiro
新谷和輝	NIYA Kazuki
荻野大輔	OGINO Daisuke
及川愛	OIKAWA Mana
大倉美子	OKURA Yoshiko
定井勇二	SADAI Yuji
齋藤敦子	SAITO Atsuko
斉藤陽	SAITO Yo
坂本安美	SAKAMOTO Abi
四方智子	SHIKATA Satoko
曾我満寿美	SOGA Masumi
諏訪敦彦	SUWA Nobuhiro
土屋豊	TSUCHIYA Yutaka
安田久美子	YASUDA Kumiko
吉田佳代	YOSHIDA Kayo
堀池 みほ	HORIIKE Miho
竹中島 広道	TAKENAKAJIMA Hiromichi
藤森 朋果	FUJIMORI Tomoka
福井 一夫	FUKUI Kazuo
佐々木 淳	SASAKI Jun
王山	WANG Shan
及川愛	OIKAWA Mana
松田恵莉	MATSUDA Eri
渋谷哲也	SHIBUTANI Tetsuya
杉田協士	SUGITA Kyoshi
藤原敏史	FUJIWARA Toshifumi
アンドレアス・ベッカー	Andreas BECKER
葛生賢	KUZUU Satoshi
折原みよ	ORIHARA Miyo
松下由美	MATSUSHITA Yumi
清水裕	SHIMIZU Yu

ピターズ・エンド	Bitters End
エフネス	F-ness

フリリン	FILLIN
独立映画鍋	Independent Cinema Guild
日本ファクシミリ	Japan Facsimile
ライツキューブ	Rights Cube
ステージ	Stage
東京国際映画祭	Tokyo International Festival
UNIJAPAN	UNIJAPAN
ビーモ	VIEMO
映像産業振興機構 (VIPO)	VIPO
JAIHO	JAIHO
SONIC	SONIC
クリエイティブ株式会社	CREATPS

Alberto Alvarez AGUIERA
Anais GAGLIARDI
Anne-Laure BARBARIT
Anocha SUWICHAKORNPPONG
Dorian MAGAGNIN
Hsiao Wen CHIU
Isabelle GLACHANT
Raphaëlle QUINET
Hussein AKBARALY
Ruta SVEDKAUSKAITE
Sebastien CHESNEAU
Wayne WANG
Louise RICHARD
Joris BOYER
Léonard ALTMANN
Lucie VARENNE
Fiorella AGUAYO
Alemberg ANG
Nikola JOETZE
Claude WANG
Gaïane FRITSCH
Theo LIONEL
Ara SHIN
Cecilia PEZZINI
Sabrina ARGOUB
Lorna TEE
Linda VENTURINI
Nuria PALENZUELA
Emma RIVAYRAND
Chloé VIALA
Esther DEVOS
Sébastien FOUQUE
Théophane BÉRENGER
XUAN Trang Nguyen Thi
Kendy Chan O.T.
Kenix Mak C.Y.
Angel OK SHING
Alice LEUNG
Sylvia TU
Tim MARCZENKO
Fraser ASH
Jillian GROENING
Sunny JIANG
Casper LEUNG
Josie CHOU
LIN Xudong
Joey ZHANG

WOO Jueren
WAN Jiahuan
Asian Shadows
Cercamon
Films Boutique
Finecut
Les Films du Losange
Luxbox
mk2
Pyramid Films
Goodfellas
Playtime
Indie Sales
Alpha Violet
Be For Films
Homegreen Films
Coproduction Office
Party Film Sales
charades
IQIYI
Sundream Motion Pictures
Fabula Entertainment
Rhombus Media
Ying Films

●字幕 / Subtitles Producers

アテネ・フランセ文化センター	Athénée Français Cultural Center
赤松幸洋	AKAMATSU Yukihiro
堀 三郎	HORI Saburo
今井将人	IMAI Masato
桑原広考	Gaiwane FRITZSCH
小谷香織	KOTANI Kaori
大久保美枝	OKUBO Mie
鈴木祐二	SUZUKI Yuji
田中雅子	TANAKA Masako
玉田友利子	TAMADA Yuriko
鳥居真二	TORII Shinji
吉岡文平	YOSHIOKA Bumpai

●字幕翻訳・監修 / Subtitles Translators/Supervisors

秋葉亜子	AKIBA Ako
市山尚三	ICHIYAMA Shozo
大西公子	ONISHI Kimiko
神谷直希	KAMIYA Naoki
島根磯美	SHIMANE Isomi
杉山緑	SUGIYAMA Midori
鈴木真理子	SUZUKI Mariko
手束紀子	TEZUKA Noriko
根本理恵	NEMOTO Rie
橋本裕充	HASHIMOTO Hiromitsu
樋口裕子	HIGUCHI Yuko
藤井美佳	FUJII Mika
松岡環	MATSUOKA Tamaki
松岡葉子	MATSUOKA Yoko
間瀬康子	MABUCHI Yasuko
最上麻衣子	MOGAMI Maiko

スタッフ / Staff

特定非営利活動法人東京フィルメックス 事務局

プログラム・ディレクター: Director of Programming

神谷直希	KAMIYA Naoki
久米修人	KUME Shuto
林 未侑	HAYASHI Miyu (タレント・トーキョー / Talents Tokyo)
朱美霖	ZHU Meilin
山崎睦美	YAMAZAKI Mutsumi
曹 瀟瀟	CAO Xiaoxiao (タレント・トーキョー / Talents Tokyo)
富田三起子	TOMITA Mikiko
真木弘智	MAKI Hiroto
大塚健太郎	OTSUKA Kentaro (808)
市川太一	ICHIKAWA Taichi (808)
田邊友妃	TANABE Yuki (808)
吉海裕三	YOSHIKAI Yuzo
水野綾	MIZUNO Aya
杉山智昭	SUGIYAMA Tomoaki
荒川佳祐	ARAKAWA Keisuke (Pio)
副島論史	SOEJIMA Satoshi (Pio)

パブリシティ

斉藤陽	SAITO Yo (Playtime)
牧野咲耶子	MAKINO Sakuyako (P2)

作品選考委員 Selection and Preselection Committee

神谷直希	KAMIYA Naoki
金敬淑	KIM Kyungsook
朱美霖	ZHU Meilin
松本元子	MATSUMOTO Motoko
森宗厚子	MORIMUNE Atsuko
深津純子	FUKATSU Junko
山崎睦美	YAMAZAKI Mutsumi
明田川 志保	AKETAGAWA Shiiho
青木希羅	AOKI Kiyora
足羽 美香	ASHIWA Mika
藤井 秋	FUJII Shu

浜 知江	HAMA Chie
濱口 芽生	HAMAGUCHI Mei
	HAN Yushi
半田 真須美	HANDA Masumi
石田 京介	ISHIDA Kyosuke
岩崎 由希	IWASAKI Yuki
賈 曠霆	JIA Xiaoting
ヤン・ジミン	YANG Jimin
木村 美由起	KIMURA Miyuki
小林 鉄平	KOBAYASHI Tepei
小松田 みなみ	KOMATSUDA Minami
国松 恵	KUNIMATSU Megumi
桑原 杏奈	KUWAHARA Anna
	LI Yang
三澤 遼	MISAWA Ryo
三好 鞠菜	MIYOSHI Marina
長崎徳恭	NAGASAKI Noriyuki
直井 佑樹	NAOI Yuki
吉原 和花	YOSHIHARA Nodoka
奥谷 洋一郎	OKUTANI Yoichiro
澤山 恵次	SAWAYAMA Keiji
小林 星牙	KOBAYASHI Seiga
沈 周	SHEN Zhou
高田 龍太郎	TAKADA Ryutaro
高橋 美幸	TAKAHASHI Miyuki
高久 聡明	TAKAKU Toshiaki
田中 雅子	TANAKA Masako
綿貫 孝哉	WATANUKI Takaya
矢嶋 久恵	YAJIMA Hisae
横山 智彦	YOKOYAMA Tomohiko
吉田 美幸	YOSHIDA Miyuki
吉田 留美	YOSHIDA Rumi
袁 峯楓	YUAN Yinfeng

第25回東京フィルメックス / TOKYO FILMeX 2024

第25回東京フィルメックス 公式カタログ	TOKYO FILMeX 2024 Official Catalog
発行日 2024年11月23日	Date of Publication November 23, 2024
発行 認定NPO法人東京フィルメックス 〒163-0245 東京都新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル45F TEL:03-6258-0333 / FAX:03-6258-0339	Publisher TOKYO FILMeX (Approved Specified Nonprofit Organization) 45th FL, Shinjuku Sumito Bldg.2-6-1 Nishi-shinjuku, Shinjuku-ku Tokyo 163-0245 JAPAN Tel: +81-3-6258-0333 / Fax: +81-3 6258 0339
編集 佐々木淳	Editor SASAKI Atsushi
デザイン 中平一史(Viemo)	Designer NAKADAIWA Kazushi(Viemo)
解説 神谷直希	Film Notes KAMIYA Naoki
翻訳 田中純子 / ジェレミー・ハーレイ / 宋倫 林未侑 / 久米修人 / 朱美霖 ※無断転載を禁ず	Translation TANAKA Junko / Jeremy HARLEY / SONG Lynn HAYASHI Miyu / KUME Shuto / ZHU Meilin *Reprinting or reproducing any content of this catalog is prohibited without permission of the publisher.